

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第662集

ほろ　たい  
**縦帶遺跡発掘調査報告書**

地域連携道路整備事業一般国道340号和井内  
関連遺跡発掘調査

2017

岩手県沿岸広域振興局土木部宮古土木センター  
(公財)岩手県文化振興事業団

# 襄帯遺跡発掘調査報告書

地域連携道路整備事業一般国道340号和井内  
関連遺跡発掘調査

## 序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことの出来ない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、岩手県宮古市和井内の国道340号改修に関連して平成27年度に発掘調査を実施した、縄文遺跡の調査成果をまとめたものです。

縄文遺跡の調査は、平成18年度に統いて2回目となります。前回と同様に縄文時代中期の集落が営まれていたことが確認されました。また、新たに今回、中世の遺構も見つかり、縄文時代以降、中世を経て現代に至るまで人間活動による営みのあったことが分かりました。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての关心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました岩手県沿岸広域振興局土木部宮古土木センター、宮古市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成29年3月

公益財団法人 岩手県文化振興事業団

理事長 菅野洋樹

## 例　　言

- 1 本報告書は、岩手県宮古市和井内第23地割13-5 ほかに所在する表帶遺跡の発掘調査成果を収録したものである。
- 2 今回の調査は、地域連携道路整備事業一般国道340号和井内建設に伴う事前の緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課の指導・調整のもとに、岩手県沿岸広域振興局土木部宮古土木センターの委託を受け、公益財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 本遺跡の岩手県遺跡台帳における遺跡コードはLF19-2060、遺跡略号はHT-15である。
- 4 野外調査及び室内整理期間、調査担当者は次の通りである。
  - ・野外調査 2015年5月18日～7月28日 北田 繁・伊藤 武・近藤行仁・大坪華子
  - ・室内整理 2015年9月1日～2016年3月31日 大坪華子
- 5 本報告書の作成は、北田が本文原稿、伊藤・大坪が遺構図化、北田が遺物図化を行い、各々に文責を記した。またI調査に至る経過は宮古土木センターが行った。全体の編集は北田が行った。
- 6 業務委託は、以下の通りである。
  - ・（株）スズマ測量設計 座標原点の測量
  - ・花崗岩研究会 石器類石材同定
- 7 本書では以下の地形図・空中写真を使用した。
  - ・『1/50,000地形図 宮古・川井・田老・大川』（国土地理院）
  - ・『1/25,000地形図 和井内』（国土地理院）
  - ・1977年9月28日撮影空中写真CTO775-C5-34（国土地理院）
- 8 野外調査及び本報告書の作成にあたり、次の機関からご指導・ご助言・ご協力をいただいた。  
宮古市教育委員会
- 9 発掘調査資料は、全て岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管している。
- 10 調査成果の一部については、平成27年度調査概報（岩埋文第661集）、現地公開資料等に発表してきたが、本書の記載内容が優先するものである。

## 凡　　例

1 遺構図の用例は次の通りである（凡例図参照）。

(1) 遺構実測図の縮尺は竪穴住居跡及び土坑の平面・断面図1/60、焼土・炉の平面・断面図1/30などで表した。ただし規模の関係上これに合わないものもあるため、各図版にスケール及び縮尺を付した。

(2) 推定線は破線で表した。また、スクリーントーンを使用して遺構の状況を表した。

(3) 層位は、基本層序にローマ数字、各遺構堆積土などにアラビア数字を使用した。

(4) 土層色調観察には、農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を使用した。

2 遺物実測図の用例は次の通りである（凡例図参照）。

(1) 遺物実測図の縮尺は、縄文土器・陶磁器1/3、石器2/3・1/3・1/6、金属製品1/2、錢貨2/3で表した。

(2) スクリーントーンを使用して、遺物の状態を表した。

3 写真図版の用例は次の通りである。

(1) 遺構写真図版については、基本的に平面及び断面写真をセットとし掲載した。

(2) 遺物写真図版については、縮尺は基本的に遺物実測図に準じている。

遺構使用トーン凡例

|  |       |      |
|--|-------|------|
|  | 焼土(弱) | K20% |
|  | 焼土(強) | K40% |
|  | 炭化物   | K60% |

遺物使用トーン凡例

|  |        |      |
|--|--------|------|
|  | 土器赤彩   | K20% |
|  | 石器磨痕   | K20% |
|  | 金属製品断面 | K30% |

## 目 次

|                      |    |
|----------------------|----|
| I 調査に至る経過 .....      | 1  |
| II 遺跡の立地・環境 .....    | 1  |
| 1 遺跡の位置 .....        | 1  |
| 2 地形環境 .....         | 3  |
| (1) 遺跡周辺の地形・地質 ..... | 3  |
| (2) 調査区の層序 .....     | 3  |
| 3 歴史的環境・過去の調査 .....  | 4  |
| III 調査・整理の方法 .....   | 7  |
| 1 野外調査方法 .....       | 7  |
| (1) 調査方法 .....       | 7  |
| (2) 野外調査経過 .....     | 7  |
| 2 整理方法 .....         | 8  |
| (1) 遺構の整理 .....      | 8  |
| (2) 遺物の整理 .....      | 8  |
| (3) 遺物写真撮影 .....     | 8  |
| (4) 整理経過 .....       | 8  |
| 3 広報活動 .....         | 8  |
| IV 調査内容 .....        | 14 |
| 1 概要 .....           | 14 |
| 2 遺構 .....           | 14 |
| (1) 壊穴住居跡 .....      | 14 |
| (2) 壊穴建物跡 .....      | 36 |
| (3) 掘立柱建物跡 .....     | 40 |
| (4) 土坑 .....         | 42 |
| (5) 墓坑 .....         | 51 |
| (6) 焼土 .....         | 51 |
| (7) 柱穴状土坑 .....      | 51 |
| (8) 性格不明遺構 .....     | 53 |
| (9) 包含層 .....        | 53 |
| 3 遺物 .....           | 54 |
| (1) 繩文土器 .....       | 54 |
| (2) 石器 .....         | 55 |
| (3) 土製品 .....        | 75 |
| (4) 陶磁器 .....        | 75 |

|             |    |
|-------------|----|
| (5) 金 属 製 品 | 75 |
| (6) 錢 貨     | 76 |

|           |     |
|-----------|-----|
| V 総 括     | 102 |
| 1 繩 文 時 代 | 102 |
| 2 中 世     | 104 |
| 3 そ の 他   | 104 |
| 報告書抄録     | 167 |

## 図 版 目 次

### 凡例図

|                                |    |  |     |
|--------------------------------|----|--|-----|
| 第1図 遺跡位置図                      | 2  | 第31図 SB02掘立柱建物跡                        | 42  |
| 第2図 調査範囲図                      | 3  | 第32図 SK01~09・15土坑                      | 43  |
| 第3図 基本層序柱状模式図                  | 4  | 第33図 SK10~14・16~18・21土坑                | 45  |
| 第4図 周辺の遺跡分布図                   | 6  | 第34図 SK19・20・22~29土坑                   | 47  |
| 第5図 調査全体図                      | 9  | 第35図 SK30・32~34・36~39土坑                | 49  |
| 第6図 部分図（1）                     | 10 | 第36図 SK41~43土坑                         | 50  |
| 第7図 部分図（2）                     | 11 | 第37図 SK31・35墓坑                         | 51  |
| 第8図 部分図（3）                     | 12 | 第38図 SF01・02焼土、P.1~4柱穴状土坑、SX01<br>落ち込み | 52  |
| 第9図 部分図（4）                     | 13 | 第39図 北側包含層                             | 53  |
| 第10図 SI01・02堅穴住居跡（1）           | 15 | 第40図 繩文土器（1）                           | 56  |
| 第11図 SI01・02堅穴住居跡（2）           | 16 | 第41図 繩文土器（2）                           | 57  |
| 第12図 SI03・04堅穴住居跡（1）           | 17 | 第42図 繩文土器（3）                           | 58  |
| 第13図 SI03・04堅穴住居跡（2）           | 18 | 第43図 繩文土器（4）                           | 59  |
| 第14図 SI05・06堅穴住居跡、SII1堅穴建物跡（1） | 19 | 第44図 繩文土器（5）                           | 60  |
| 第15図 SI05・06堅穴住居跡、SII1堅穴建物跡（2） | 20 | 第45図 繩文土器（6）                           | 61  |
| 第16図 SI07・08堅穴住居跡              | 21 | 第46図 繩文土器（7）                           | 62  |
| 第17図 SI09・10堅穴住居跡              | 23 | 第47図 繩文土器（8）                           | 63  |
| 第18図 SII2~14堅穴住居跡              | 25 | 第48図 繩文土器（9）                           | 64  |
| 第19図 SII5堅穴住居跡                 | 26 | 第49図 繩文土器（10）                          | 65  |
| 第20図 SII7堅穴住居跡                 | 27 | 第50図 繩文土器（11）                          | 66  |
| 第21図 SII8・19堅穴住居跡              | 29 | 第51図 繩文土器（12）                          | 67  |
| 第22図 SI20・21堅穴住居跡              | 30 | 第52図 繩文土器（13）                          | 68  |
| 第23図 SI22堅穴住居跡                 | 31 | 第53図 繩文土器（14）                          | 69  |
| 第24図 SI23堅穴住居跡                 | 33 | 第54図 繩文土器（15）                          | 70  |
| 第25図 SI28・29堅穴住居跡              | 34 | 第55図 繩文土器（16）、土製品、石器（1）                | 71  |
| 第26図 SI30・31堅穴住居跡              | 35 | 第56図 石器（2）                             | 72  |
| 第27図 SI16・24堅穴建物跡              | 37 | 第57図 石器（3）                             | 73  |
| 第28図 SI25・26堅穴建物跡              | 39 | 第58図 石器（4）、陶磁器、金属製品、墓坑出土<br>遺物（1）      | 74  |
| 第29図 SI27堅穴建物跡                 | 40 | 第59図 墓坑出土遺物（2）                         | 75  |
| 第30図 SB01掘立柱建物跡                | 41 | 第60図 時期別調査全体図                          | 103 |

## 表 目 次

|                          |    |                      |     |
|--------------------------|----|----------------------|-----|
| 第1表 周辺の遺跡分布表 .....       | 5  | 第5表 土製品観察表 .....     | 100 |
| 第2表 堅穴住居跡内柱穴状土坑計測表 ..... | 76 | 第6表 石器観察表 .....      | 100 |
| 第3表 遺構外柱穴状土坑計測表 .....    | 79 | 第7表 陶磁器観察表 .....     | 100 |
| 第4表 繩文土器観察表 .....        | 88 | 第8表 金属製品・錢貨観察表 ..... | 101 |

## 写真図版目次

|                              |     |   |     |
|------------------------------|-----|---|-----|
| 写真図版1 調査区全景（1） .....         | 107 | 写真図版35 SK05~08土坑 .....                              | 141 |
| 写真図版2 調査区全景（2） .....         | 108 | 写真図版36 SK09~11・13・18土坑 .....                        | 142 |
| 写真図版3 SI01堅穴住居跡 .....        | 109 | 写真図版37 SK12・14・15・17土坑 .....                        | 143 |
| 写真図版4 SI02堅穴住居跡（1） .....     | 110 | 写真図版38 SK16・19~21土坑 .....                           | 144 |
| 写真図版5 SI02堅穴住居跡（2） .....     | 111 | 写真図版39 SK22~26土坑 .....                              | 145 |
| 写真図版6 SI03堅穴住居跡 .....        | 112 | 写真図版40 SK27~30土坑 .....                              | 146 |
| 写真図版7 SI04堅穴住居跡 .....        | 113 | 写真図版41 SK32・33・36~39土坑 .....                        | 147 |
| 写真図版8 SI05堅穴住居跡 .....        | 114 | 写真図版42 SK41・42土坑、SK31・35墓坑、<br>SF01・02焼土 .....      | 148 |
| 写真図版9 SI06堅穴住居跡 .....        | 115 | 写真図版43 SX01落ち込み、北側包含層、現況、<br>作業風景（1） .....          | 149 |
| 写真図版10 SI07堅穴住居跡 .....       | 116 | 写真図版44 作業風景（2）、現地公開風景 .....                         | 150 |
| 写真図版11 SI08堅穴住居跡 .....       | 117 | 写真図版45 SI01・02出土土器 .....                            | 151 |
| 写真図版12 SI09堅穴住居跡 .....       | 118 | 写真図版46 SI03（1）出土土器 .....                            | 152 |
| 写真図版13 SI10堅穴住居跡 .....       | 119 | 写真図版47 SI03（2）・SI04~08出土土器 .....                    | 153 |
| 写真図版14 SI12堅穴住居跡 .....       | 120 | 写真図版48 SI09~12・SI14出土土器 .....                       | 154 |
| 写真図版15 SI13・14堅穴住居跡 .....    | 121 | 写真図版49 SI15・SI17（1）出土土器 .....                       | 155 |
| 写真図版16 SI15堅穴住居跡 .....       | 122 | 写真図版50 SI17（2）出土土器 .....                            | 156 |
| 写真図版17 SI17堅穴住居跡 .....       | 123 | 写真図版51 SI17（3）・SI18~20・SI22・SI23（1）<br>出土土器 .....   | 157 |
| 写真図版18 SI18・19堅穴住居跡（1） ..... | 124 | 写真図版52 SI20・SI23（2）・SI26・SI28・SI29<br>(1)出土土器 ..... | 158 |
| 写真図版19 SI19堅穴住居跡（2） .....    | 125 | 写真図版53 SI29（2）・SI30・SI31（1）<br>出土土器 .....           | 159 |
| 写真図版20 SI20堅穴住居跡 .....       | 126 | 写真図版54 SI31（2）、SK（1）出土土器 .....                      | 160 |
| 写真図版21 SI21堅穴住居跡 .....       | 127 | 写真図版55 SK（2）出土土器 .....                              | 161 |
| 写真図版22 SI22堅穴住居跡（1） .....    | 128 | 写真図版56 SK（3）、SX、P（1）出土土器 .....                      | 162 |
| 写真図版23 SI22堅穴住居跡（2） .....    | 129 | 写真図版57 P（2）、遺構外（1）出土土器 .....                        | 163 |
| 写真図版24 SI23堅穴住居跡 .....       | 130 | 写真図版58 遺構外（2）出土土器、土製品、<br>石器（1） .....               | 164 |
| 写真図版25 SI28堅穴住居跡 .....       | 131 | 写真図版59 石器（2） .....                                  | 165 |
| 写真図版26 SI29堅穴住居跡 .....       | 132 | 写真図版60 石器（3）、陶磁器、金属製品、<br>墓坑出土遺物 .....              | 166 |
| 写真図版27 SI30堅穴住居跡 .....       | 133 |   |     |
| 写真図版28 SI31堅穴住居跡 .....       | 134 |   |     |
| 写真図版29 SI11・24堅穴建物跡 .....    | 135 |   |     |
| 写真図版30 SI16堅穴建物跡 .....       | 136 |   |     |
| 写真図版31 SI25堅穴建物跡 .....       | 137 |   |     |
| 写真図版32 SI26・27堅穴建物跡 .....    | 138 |   |     |
| 写真図版33 SB01・02掘立柱建物跡 .....   | 139 |   |     |
| 写真図版34 SK01~04土坑 .....       | 140 |   |     |

## I 調査に至る経過

震帯遺跡は、「一般国道340号和井内地区地域連携道路整備事業」の道路改良工事に伴い、その事業地内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

一般国道340号は、宮古市（旧新里村）北西部に位置する。本路線は陸前高田市を基点とし、青森県八戸市に至る幹線道路にもかかわらず地形的な制約から1車線しかなく、一般車両のすれ違いにも支障をきたしている。このような幅員狭小、カーブが連続する隘路でありながら、隣接していたJR岩泉線の廃線に伴う地域交通の代替道路としての重要な役割を背負っている。また、三陸沿岸道路等の復興道路を補完する道路として、三陸復興道路整備事業における復興支援道路に位置付けられている。

のことから、これらの交通障害を解消し、交通の安全と円滑化、地域の生活改善を図るとともに、災害に強い道づくりと地域間交流を促進するために事業着手したものである。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、沿岸広域振興局土木部宮古土木センターから平成26年10月8日付宮土セ第576号「一般国道340号和井内地区における埋蔵文化財の試掘調査（依頼）」により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。

依頼を受けた岩手県教育委員会は、平成26年10月15日～12月2日に試掘調査を実施し、工事に着手するには震帯遺跡の発掘調査が必要となる旨を平成26年12月5日付教生第1303号「埋蔵文化財の試掘調査について（回答）」により当土木センターへ回答してきた。

その結果を踏まえて、当土木センターは岩手県教育委員会と協議し、調整を受けて平成27年5月11日付で公益財団法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することになった。  
(岩手県沿岸広域振興局土木部宮古土木センター)

## II 遺跡の立地・環境

### 1 遺跡の位置

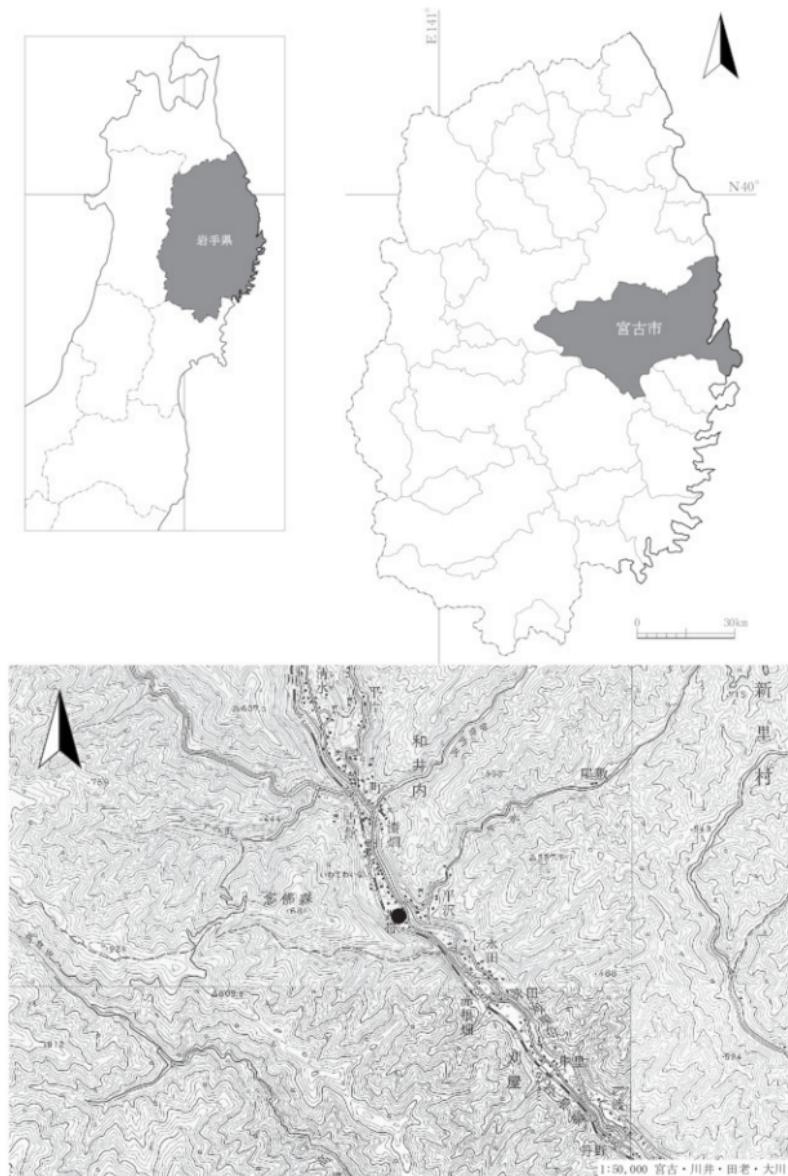
震帯遺跡は、岩手県宮古市和井内第23地割13-5ほかに所在する。国土地理院発行50,000分の1地形図NJ-54-13-6（盛岡6号）「大川」の図幅に含まれ、北緯40度19分00秒、東経141度43分39秒に位置する。

遺跡は、宮古市の旧下閉伊郡新里村の村域にあり、2014年4月に廃止となったJR岩泉線岩手和井内駅から南に約600m、刈屋川の右岸に形成された河岸段丘上に立地している。現況は宅地・畑地・道路で、標高は187～190mである。

宮古市は、岩手県沿岸部のほぼ中央、本州では最東端に位置している。西は盛岡市、北は岩泉町、南は花巻市・遠野市・山田町に接し、総面積は1,259.89km<sup>2</sup>で、岩手県の総面積の約8.2%を占めている（宮古市HP宮古市市勢要覧から引用）。

遺跡のある旧新里村は、宮古市の西に隣接する南北約25km、東西約22kmの面積256.29km<sup>2</sup>、総人口3,535人（2005年）の下閉伊郡内の山間部の村であったが、平成の大合併である平成17（2005）年6月6日に宮古市と合併した。その後、西に隣接していた下閉伊郡川井村も平成22（2010）年1月1日に宮古市に編入となり、現在の宮古市となった。

1 遺跡の位置



第1図 遺跡位置図

和井内地区は、旧新里村域でも北部にあり、刈屋川沿いに形成された集落が河岸段丘によりやや広くなった場所を中心に見られる。

## 2 地形環境

### (1) 遺跡周辺の地形・地質

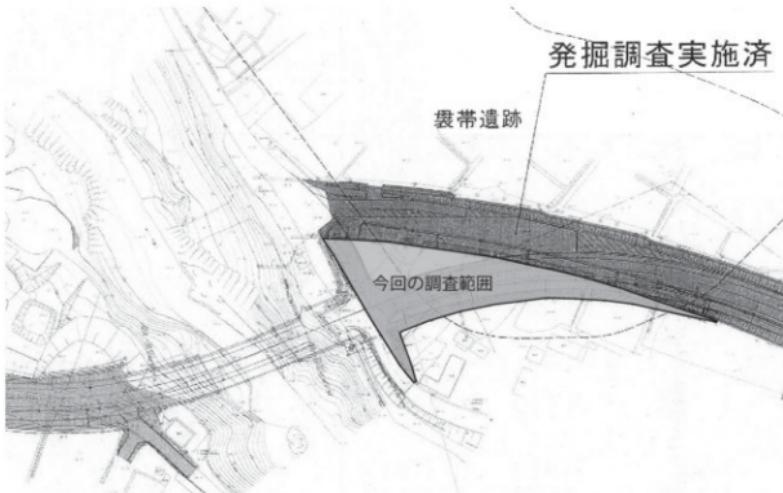
遺跡は、刈屋川西岸の河岸段丘上に立地している。刈屋川は、押角付近の山中にその源を発し、遺跡の所在する和井内や刈屋を抜け、宮古市茂市付近で閉伊川に合流する。全体には北西から南東方向に流下しており、押角から和井内にかけては狭小な渓谷を縫うように流れている。遺跡のすぐ東側を刈屋川が南流しているが、遺跡の立地する段丘面からは急峻な崖地形となっており、現河床面との比高差は20m前後である。幅の狭い山間の谷川のため、川が左右に振られずそのまま下削した結果、20mという崖地形を形成したと考えられる。

刈屋川には、東西に接する山間から小河川が延びており、和井内付近でも安庭沢や岩穴川、アニアの沢、伊佐内沢、平沢川などがさらに合流していて、この合流点付近には狭小な段丘面が作られている。遺跡も刈屋川に平沢川が合流する地点に位置し、このため幅200mにも満たないがこの流域ではやや幅の広い平坦地となっている。

刈屋川周辺の地質は、主に古生層の堆積岩類（角岩、砂岩、粘板岩）からなり、上流の一部には花崗岩の貫入が見受けられる（岩垣文2008）。

### (2) 調査区の層序

今回の調査で確認された基本層序は、第3図の通りである。大半の箇所でⅡ・Ⅲ層は削平されており、表土直下にⅣ層が確認された。Ⅱ・Ⅲ層が良好に確認されたのは、遺構が集中していた調査区東側と平成18年度調査区との境界付近であった。



第2図 調査範囲図

今回の調査箇所は、前回調査区の東側の隣接地である。これから基本層序はほぼ同様と考えられるが、地形面に若干の差異があり、認められる土層にもやや違いが見受けられる。

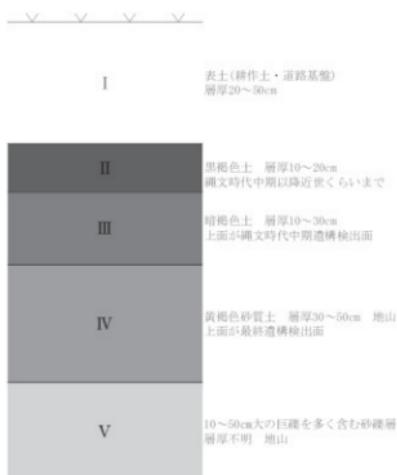
調査区は東西に長い三角形の形状で、東西約100m・南北は広い箇所で約35mである。現況では、北西から南東に向かって緩やかに傾斜する地形であるが、遺構検出面の微地形は中央付近が若干高くなっている付近にはIV層砂疊層が露出しており、その西側と東側にはIV層黄褐色砂質土が認められた。このことからも地形の高まりが存在し、掘削の際にこの部分のIV層が削られたことで、V層が露出したと考えられる。V層については、古刈屋川によって形成された段丘疊層と捉えられる。巨礫を多く含むことから、遺跡近郊の山体斜面が供給源と考えられる。

### 3 歴史的環境・過去の調査

縄文遺跡の歴史的な環境については、前回調査に詳しく掲載してあるので参照されたい（岩埋文2008）。ここでは、前回調査について概略して記載する。

前回調査は、一般国道340号和井内地区道路改築事業に関連して、平成18（2006）年5月1日～11月10日まで行われた。調査面積は8,698m<sup>2</sup>、検出遺構は縄文時代中期後～末葉の竪穴住居跡36棟のほか、縄文時代前期前葉の住居状遺構1棟・土坑1基や晚期前葉の竪穴住居跡1棟、土坑63基、掘立柱建物3棟、中近世墓5基が確認されている。

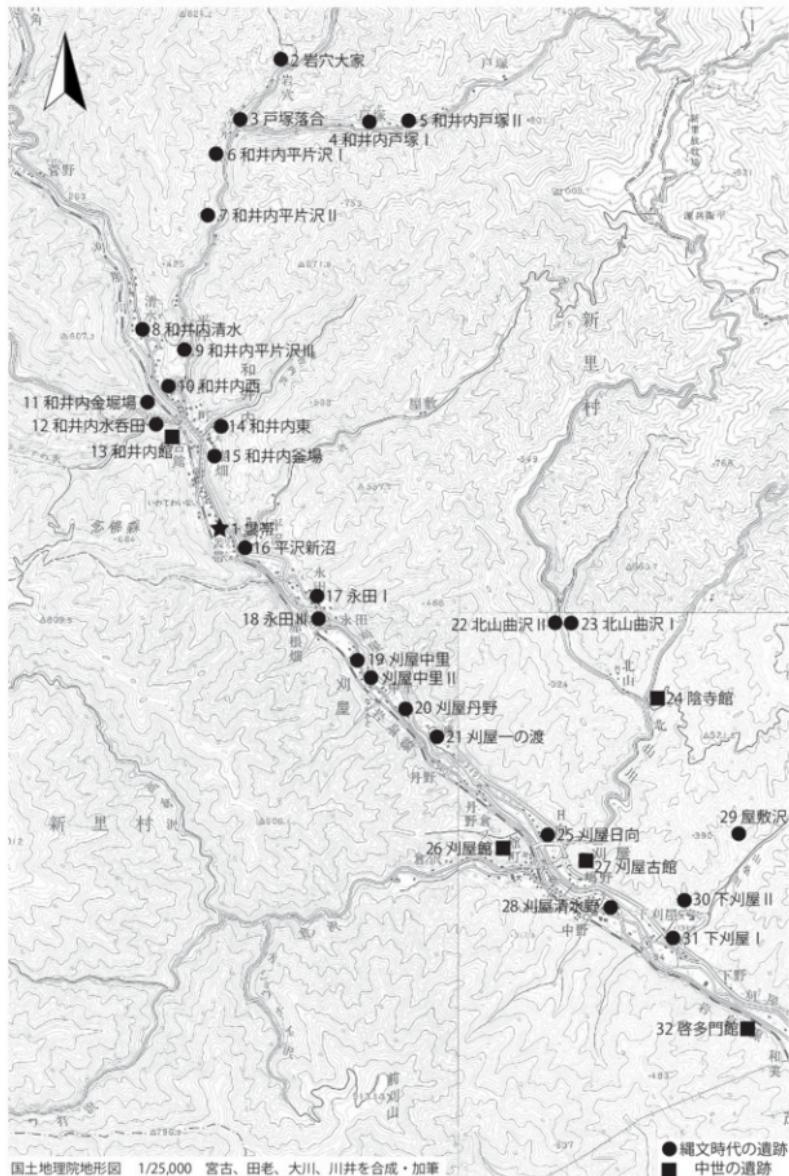
縄文時代中期後～末葉の竪穴住居跡については、伴出土器から大木9式古段階、大木9式新段階、大木10式の3期が想定されている。大木9式古段階は竪穴住居跡9棟と考えられ、今回の調査区と隣接する前回調査区南側に集中する。ただし、この中でも4時期に変遷し、一時期2～3棟で構成されるとしている。次に、大木9式新段階は竪穴住居跡27棟と住居状遺構10棟と捉えられ、集落の最盛期とされる。今回調査区の北側である、前回調査区北西側から中央に分布する。古段階に比べて重複する遺構数が少ないことから、複数の住居が存在していたと推定している。大木10式の時期は、竪穴住居跡2棟と住居状遺構1棟が含まれる。散在した遺構分布となり、前回調査区の北東側に遺構が展開すると想定している。



第3図 基本層序柱状模式図

第1表 周辺の遺跡分布表

| No | 遺跡コード     | 遺跡名          | 種別  | 時代            | 遺情・遺物                            | 調査経緯  | 文献   | 備考                  |
|----|-----------|--------------|-----|---------------|----------------------------------|---|--|---------------------|
| 1  | LF19-2060 | 貝塚           | 集落跡 | 縄文・中世<br>後、近世 | 縄文土器（早一晩<br>期）、上製品、石<br>器、コハク、古鏡 | 2006年5月1日～同年11月10日 発掘調査。<br>2009年10月 範例拡大（分布調査）。  | 波寄遺跡発掘調査報告書（岩津文<br>第322集）、宮古市道路分布調査報<br>告書6（宮古市埋文部77）    |                     |
| 2  | LF09-0097 | 岩穴大家         | 散布地 | 縄文            | 縄文土器                             | 2009年10月 範例縮小（分布調査）。  | 宮古市道路分布調査報告書6（宮<br>古市埋文部77）                              |                     |
| 3  | LF09-1053 | 戸保落合         | 散布地 | 縄文            | 縄文土器                             | 2009年10月 範例縮小（分布調査）。  | 宮古市道路分布調査報告書6（宮<br>古市埋文部77）                              |                     |
| 4  | LF09-1156 | 和井内平沢Ⅰ       | 散布地 | 縄文            | 縄文土器                             | 平成22年10月19日新規発見（分布調査）   |  |                     |
| 5  | LF09-1250 | 和井内平沢Ⅱ       | 散布地 | 縄文・古<br>墳     | 縄文土器、埴輪                          | 平成22年10月19日新規発見（分布調査）   |  |                     |
| 6  | LF09-1091 | 和井内平片沢Ⅰ      | 散布地 | 縄文            | 縄文土器（中期～後<br>期）                  | 2009年10月 新規発見（分布調査）。  | 宮古市道路分布調査報告書6（宮<br>古市埋文部77）                              |                     |
| 7  | LF09-2050 | 和井内平片沢Ⅱ      | 散布地 | 縄文            | 縄文土器                             | 2009年10月 新規発見（分布調査）。  | 宮古市道路分布調査報告書6（宮<br>古市埋文部77）                              |                     |
| 8  | LF18-0352 | 和井内清水        | 散布地 | 縄文            | 縄文土器                             | 2009年10月 範例拡大（分布調査）。  | 宮古市道路分布調査報告書6（宮<br>古市埋文部77）                              |                     |
| 9  | LF18-1308 | 和井内平片沢Ⅲ      | 散布地 | 縄文            | 土器、鉄片                            | 2009年10月 和井内平片遺道より名前の変更<br>と範例縮小（分布調査）。   | 宮古市道路分布調査報告書6（宮<br>古市埋文部77）                              |                     |
| 10 | LF18-1335 | 和井内東西        | 散布地 | 縄文            | 土器、石器、石<br>柱、石斧、石矛               |   | 宮古市道路分布調査報告書6（宮<br>古市埋文部77）                              |                     |
| 11 | LF18-1356 | 和井内金原場       | 散布地 | 縄文            | 縄文土器（前期）                         | H10新規。2009年10月 範例縮小（分布調<br>査）。  | 宮古市道路分布調査報告書6（宮<br>古市埋文部77）                              |                     |
| 12 | LF18-1374 | 和井内木谷田       | 散布地 | 縄文            | 縄文土器（晚期）                         | 2009年10月 範例縮小（分布調査）。  | 宮古市道路分布調査報告書6（宮<br>古市埋文部77）                              |                     |
| 13 | LF18-1395 | 和井内船         | 城館跡 | 中世            | 帶部、空堀                            | 2009年10月 範例縮小（分布調査）。  | 宮古市道路分布調査報告書6（宮<br>古市埋文部77）                              |                     |
| 14 | LF18-1379 | 和井内東         | 集落跡 | 縄文            | 縄文土器、弥生土<br>器、銅片、铁器              | H12村敷設調査実施。2009年10月 範例縮小<br>（分布調査）。   | 和井内東遺跡発掘調査報告書（新<br>里町2001年）、宮古市道路分布調<br>査報告書6（宮古市埋文部77）  |                     |
| 15 | LF19-2000 | 和井内裏場        | 散布地 | 縄文            | 縄文土器                             |   | 宮古市道路分布調査報告書6（宮<br>古市埋文部77）                              |                     |
| 16 | LF27-0004 | 平沢新沼         | 散布地 | 縄文            | 縄文土器                             |   | 宮古市道路分布調査報告書6（宮<br>古市埋文部77）                              |                     |
| 17 | LF29-0140 | 水田Ⅰ          | 散布地 | 縄文            | 縄文土器                             | 2001年11月26日～同年12月21日（第1次調<br>査、村教委）、2002年5月13日～同年6月<br>7日（第2次調査、村教委）、2009年10月<br>水田Ⅱ遺跡と統合し範例拡大（分布調<br>査）。 | 水田Ⅰ遺跡発掘調査報告書（岩津文<br>第2003年）、宮古市道路分布調<br>査報告書6（宮古市埋文部77）  |                     |
| 18 | LF29-0161 | 水田Ⅱ          | 散布地 | 縄文            | 縄文土器、弥生土器                        | H12新規、H12.12S試掘調査実施。<br>2002年8月9日 弥生土器発掘調査実施。<br>2009年10月 範例拡大（分布調査）。                                     | 若木慈理藏文化財発掘調査略報<br>（岩津文第213号）、宮古市道路分<br>布調査報告書6（宮古市埋文部77） |                     |
| 19 | LF29-1137 | 周屋中里         | 散布地 | 縄文            | 縄文土器、調片                          | 2009年10月 周屋中里Ⅱ遺跡と統合（分<br>布調査）。  | 宮古市道路分布調査報告書6（宮<br>古市埋文部77）                              |                     |
| 20 | LF29-1260 | 周屋野野         | 散布地 | 縄文            | 縄文土器（中期）                         | 2008年12月 範例拡大（分布調査）。  | 宮古市道路分布調査報告書6（宮<br>古市埋文部77）                              |                     |
| 21 | LF29-1283 | 周屋一の渡        | 散布地 | 縄文            | 縄文土器                             | 2008年12月 範例拡大（分布調査）。  | 宮古市道路分布調査報告書6（宮<br>古市埋文部77）                              |                     |
| 22 | LF29-0366 | 北山曲沢Ⅱ        | 散布地 | 縄文            | 縄文土器                             | 2008年12月 北山曲沢遺跡を北山沢の右岸と<br>左岸で分削し右岸を北山曲沢Ⅱ遺跡とした<br>(分布調査)。   | 宮古市道路分布調査報告書6（宮<br>古市埋文部77）                              |                     |
| 23 | LF29-0367 | 北山曲沢Ⅰ        | 散布地 | 縄文            | 縄文土器                             | 2008年12月 北山曲沢遺跡を北山沢の右岸と<br>左岸で分削し左岸を北山曲沢Ⅰ遺跡とした<br>(分布調査)。   | 宮古市道路分布調査報告書6（宮<br>古市埋文部77）                              |                     |
| 24 | LG30-1047 | 餘寺郷          | 城館跡 | 中世            | 帶部、空堀                            | 日々新規、林道下野原入口。2008年12月 範<br>例拡大（分布調査）。   | 宮古市道路分布調査報告書6（宮<br>古市埋文部77）                              |                     |
| 25 | LF29-2306 | 周屋日向         | 散布地 | 縄文            | 縄文土器（晚期）、<br>石器、石斧等              | 2008年12月 周屋堅石遺跡と統合（分<br>布調査）。   | 宮古市道路分布調査報告書6（宮<br>古市埋文部77）                              |                     |
| 26 | LF30-0001 | 周屋郷<br>(高松郷) | 城館跡 | 中世            | 帶部、空堀                            | 2008年12月 範例縮小（分布調査）。  | 宮古市道路分布調査報告書6（宮<br>古市埋文部77）                              |                     |
| 27 | LF30-0319 | 周屋古郷         | 城館跡 | 中世            | 幕、骨                              |   | 宮古市道路分布調査報告書6（宮<br>古市埋文部77）                              |                     |
| 28 | LG30-0073 | 周屋清水野        | 集落跡 | 縄文            | 朱漆土器、石器、<br>石燈、石斧                | 1996年7月27日～同年8月9日 発掘調査。<br>2008年11月 周屋郷の角道跡と清水野遺跡を<br>2008年11月 周屋郷の角道跡と清水野遺跡を<br>統合（分布調査）。                | 周屋郷の角道跡発掘調査報告書<br>(新里町1997年)、宮古市道路分布<br>調査報告書6（宮古市埋文部77） |                     |
| 29 | LG30-2195 | 尾根沢          | 散布地 | 縄文            | 縄文土器、石器                          | 2008年12月 範例縮小（分布調査）。  | 宮古市道路分布調査報告書6（宮<br>古市埋文部77）                              |                     |
| 30 | LG30-0069 | 下河原Ⅱ         | 散布地 | 縄文            | 縄文土器、石器                          | 2008年12月 新規発見（分布調査）。  | 宮古市道路分布調査報告書6（宮<br>古市埋文部77）                              |                     |
| 31 | LG30-0087 | 下河原Ⅰ         | 集落跡 | 縄文            | 縄文土器、石器、石<br>燈、石斧                | 2008年12月 範例拡大（分布調査）。  | 宮古市道路分布調査報告書6（宮<br>古市埋文部77）                              | 建設（因<br>道工事に<br>よる） |
| 32 | LG30-1185 | 答多門郷         | 城館跡 | 中世            | 主郎、帶部、空堀                         |   | 宮古市道路分布調査報告書6（宮<br>古市埋文部77）                              |                     |



第4図 周辺の遺跡分布図

### III 調査・整理の方法

#### 1 野外調査方法

##### (1) 調査方法

各遺構の調査方法については、土坑、ピットなど小型の遺構は二分法で行い、竪穴住居跡などの大型の遺構や複雑な堆積を呈する遺構は、随時四分法を用いて行った。また、各々について堆積土層観察用のセクションベルトを設け、土層を観察しながら精査を進めた。

この際、土層の堆積状況、遺物の出土状況、遺構の完掘状況を中心に写真撮影及び実測を随時行った。実測は、平面図はCUBIC社製遺構実測ソフト「遺構くん」を用いて光波トランシットによる測量を行い、炉や土器集中箇所などの微細図と各遺構の断面図は手取りで図化した。

遺構・遺物の写真撮影については、キヤノンEOS 6D Mark II（デジタルカメラ・1,200万画素）と中判カメラ $6 \times 4.5$ （モノクローム）を使用した。

遺構実測図の縮尺は1/20を基本としたが、炉や焼土・微細図は1/10などの縮尺を用いて遺構実測図（第一原図）を作成した。掲載については、凡例に挙げた縮尺にリサイズしている。なお、調査の進行上、土層断面の写真や実測を省略し、状態の記録や計測等のみに留めた遺構もある。

遺物の取り上げ方は、遺構内出土分については出土遺構名と出土層位を記した。包含層など遺構外遺物は、出土地点・基本層位（または接するセクション層位）を記入して取り上げた。なお、遺構外遺物の取り上げについては、前回調査で設定された4mグリッドを利用した。グリッド配置図は、岩文振第522集袈裟帯遺跡発掘調査報告書（岩文振2008）12ページの第5図遺構配置と基本層序を参照されたい。

##### (2) 野外調査経過

5月18日午前から、調査を開始した。現場設営後、同日午後から重機による表土除去と遺構検出を旧道側から着手。これは事前に、調査区東側の旧道下への遺構拡大を早期に確認するよう伝えられていたことに因る。5月22日まで作業を継続し、約1,000m<sup>2</sup>を剥ぎ終わる。並行して検出を進めたところ、調査区東側の旧道際に竪穴住居が集中して確認された。このことから、旧道舗装を一部除去して調査を行う必要が生じ、仮設道路を調査区内に設置することとなった。6月12日までに遺構集中域の精査をほぼ終了。6月15日、遺構集中域を含む調査区東側620m<sup>2</sup>について部分終了確認を行い、6月19日に同区域の引き渡しを行った。6月10日からの3日間で、残っていた表土除去を行う。精査は、東側から前回調査区に隣接する国道側へと移行する。また、北端の包含層30m<sup>2</sup>を精査し、排土置き場とする。6月21日～7月1日、仮設道路工事及び現道舗装面・碎石除去（（株）小山田組）。7月6日から、現道部分の調査に着手。7月6～7日に表土除去・排土運搬を行う。7月初旬、近世墓2基を検出。人骨の取り扱いについて、検討。7月11日（土）11～12時に現地公開を開催（一般参加者65名）。7月14日、近世墓2基から出土した人骨の供養を、曹洞宗遠洞山宝鏡院（慶徳雄仁住職）に行って頂き、同寺に無縫仏として納骨する。7月16日、終了確認。7月21～28日、重機による埋め戻し及び借地箇所からの排土撤去作業。7月28日、調査終了・撤収した。

天候は、梅雨時期であったが安定しており、順調に作業を行うことが出来た。作業日数49日間、荒天による現場閉鎖は1日間であった。

## 2 整理方法

### (1) 遺構の整理

遺構実測ソフトで図化してきた遺構図データを基に、注記や遺構の切り合い、配置などを検討しながら担当調査員が平面図を作成した。断面図は、担当調査員が第二原図を作成し、トレース図化を行った。平面図及び断面図のレイアウトなどは調査員が行った。

遺構図版は、各々遺構順に掲載した。遺構名は現場段階で命名したものを室内整理で掲載遺構名に付け直した。柱穴状土坑については、現場遺構名を優先し登録抹消となった場合は欠番としている(第3表参照)。

### (2) 遺物の整理

遺物は種類ごとに大別し、掲載遺物・要観察遺物を選別した上で登録番号を付けた。

本報告書掲載にあたっては、これらに掲載番号を付した。観察表の( )内数値は残存値、< >内数値は推定値である。

縄文土器は水洗乾燥後、収納袋ごとに注記を行い、その後、遺構ごとに接合作業を行った。掲載遺物の選別、復元作業、登録、実測、拓影、トレース、写真撮影、版組の手順で行った。土製品・陶磁器は、水洗・注記を行った後、全点を掲載遺物とし作業を進めた。石器は、水洗・注記を行った後、担当調査員が全点を観察・選別し、実測などを行った。金属製品は、水洗乾燥後に調査員が全点を観察し全点を掲載、墓坑出土遺物は写真のみ掲載した。

### (3) 遺物写真撮影

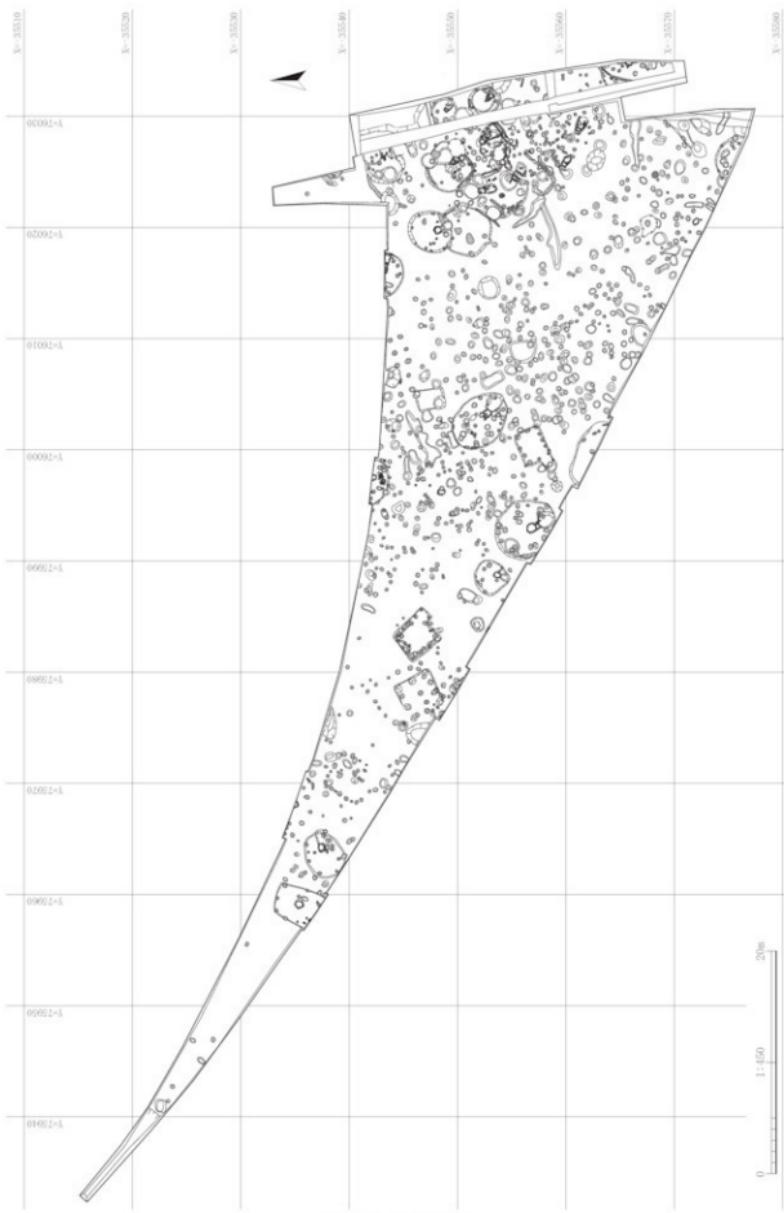
遺物写真は、当センター写場にて写真技師が撮影を行った。撮影には、キヤノン EOS 5D (デジタルカメラ・1,200万画素) を使用した。

### (4) 整理経過

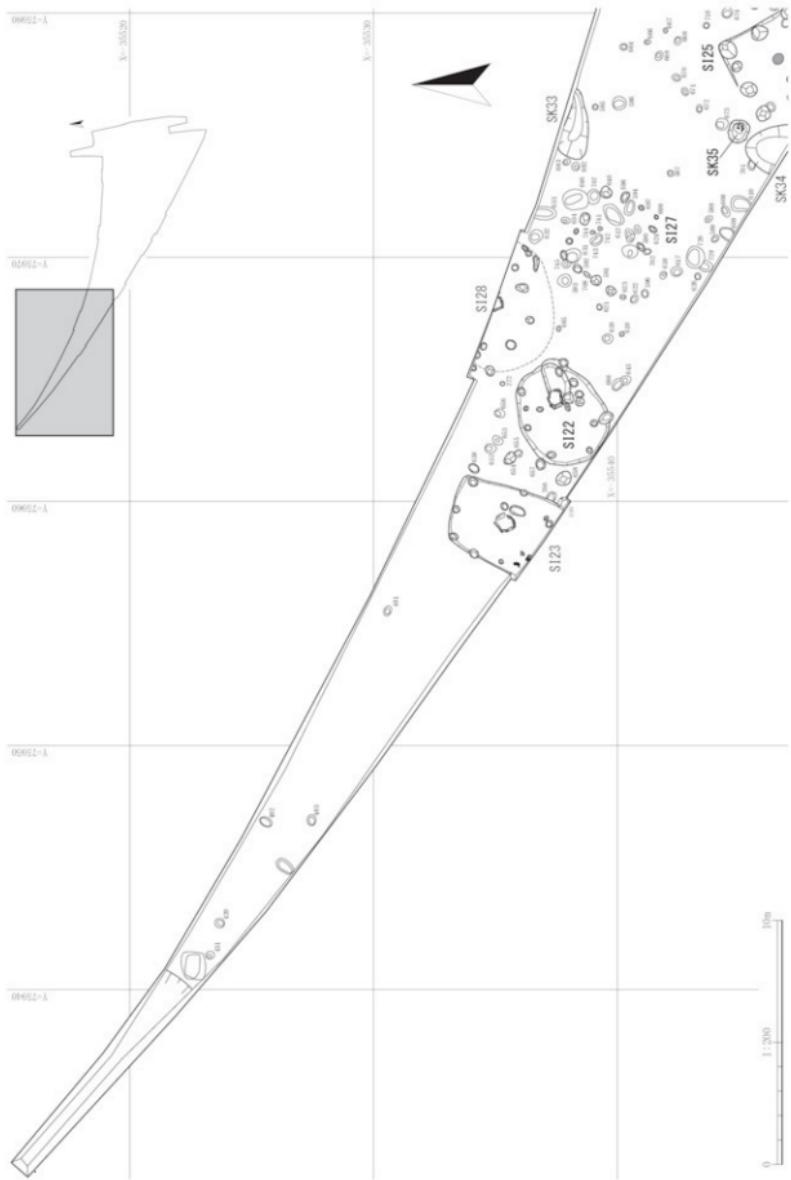
平成27年9月1日～平成28年3月31日(作業員3名体制)で室内整理作業を行った。

## 3 広報活動

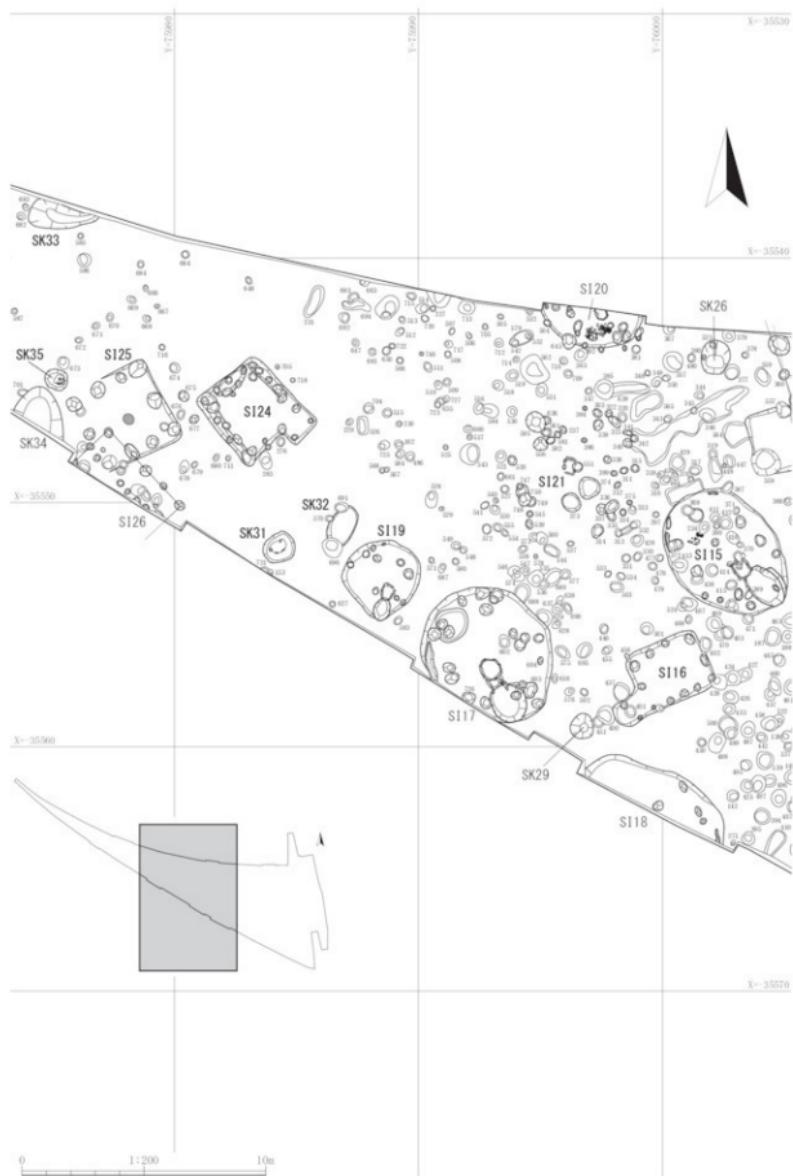
- ・調査概報 『平成27年度発掘調査報告書』岩埋文第661集 2016年3月発行
- ・平成27年度現地公開資料 2015年7月11日



第5図 調査全体図



### 第6図 部分図（1）



第7図 部分図(2)



第8図 部分図（3）



第9図 部分図(4)

## IV 調査内容

### 1 概要

前項で述べたとおり、今回の調査区は平成18年度調査区南の東側隣接地1,600m<sup>2</sup>である。今回の調査から、縄文時代中期後～末葉の堅穴住居跡25棟・掘立柱建物跡1棟・土坑36基・焼土2基・中世の堅穴建物跡6棟・掘立柱建物跡1棟・土坑2基・柱穴状土坑697個・近世以降の墓坑2基と墓と考えられる土坑1基を確認した。出土遺物は、縄文時代の土器大コンテナ12箱・石器大コンテナ4箱・土製品10点・中世の陶磁器1点・鉄織2点・近世以降の煙管1点・鉄1点・釘4点・銭貨28点である。本項では、各遺構・遺物ごとに調査した内容を記載する。

### 2 遺構

#### (1) 堅穴住居跡

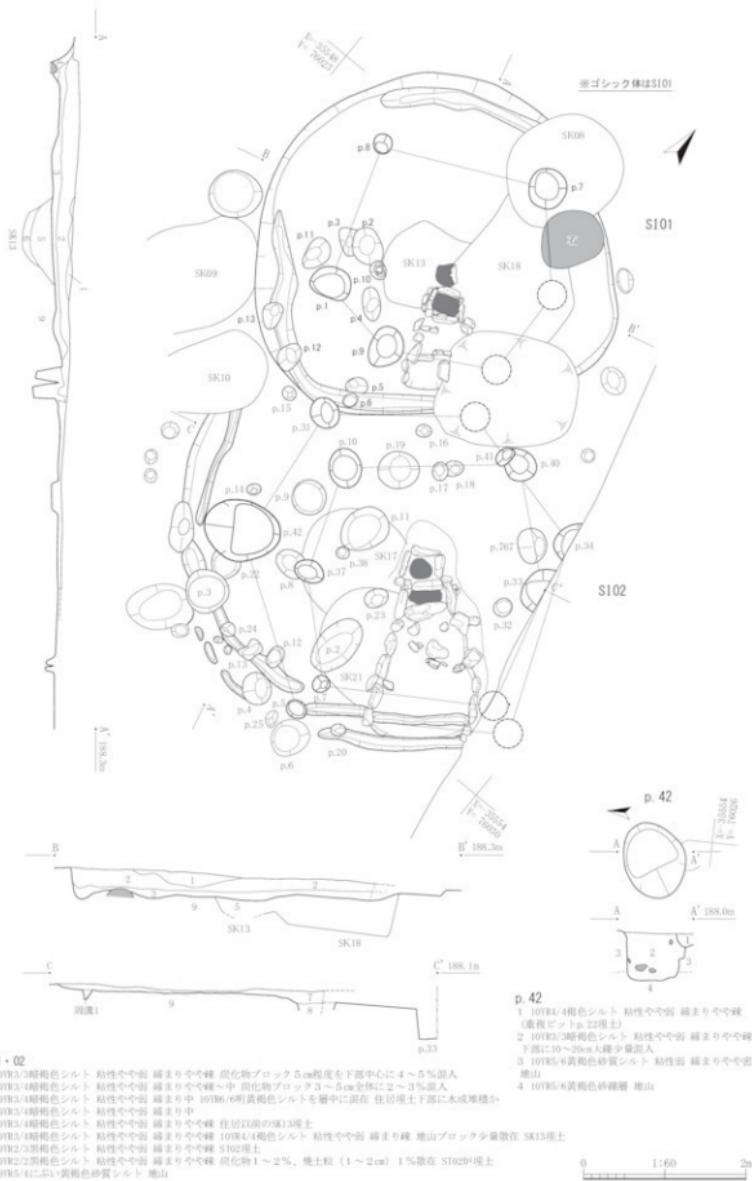
##### SI01堅穴住居跡（第10・11図、写真図版3）

調査区東側のX=-35548・Y=76023付近に位置する。遺構北東側でSK08、中央でSK13・18と重複し、これらを切る。また、南東側は近年の搅乱により、炉の一部も壊されている。南側に位置するSI02とは、断面Aから本遺構が新期と捉えられる。規模・形状は4.2m×4.5mで、炉側がやや幅広の略円形を呈する。北壁と西から南壁にかけて、深さ約10cmの周溝が作られており、溝から壁にかけては急斜度に立ち上がる形状である。床面はほぼ平坦であるが、地山に含まれる花崗岩の巨礫が散見される。南側に複式炉を1基確認した。規模は1.7m×0.8mで、埋設した礫により4箇所に区切られる。北側の2箇所に強変焼土を検出したため、燃焼部と考えられる。南側の底面は著しく硬化しており、住居の入口がこの箇所に存在した可能性がある。また、炉から50cm西のp.10から埋設された土器が出土した。土器は、底面に接しており、意図的に設置したと考えられる。ピットは住居の埋土と異なる褐色土で埋まっていたことから、設置後に人為的に埋め戻されたと考えられる。土器内の土壤を確認したが、遺物は出土しなかった。住居の主柱穴として、p.7、p.8、p.9、p.1が挙げられる。この他にSK18部分にもあったと見られるが、調査の進行により土坑を先行して調査したため、確認できなかった。また、南東隅は搅乱によって切られていると考えられる。

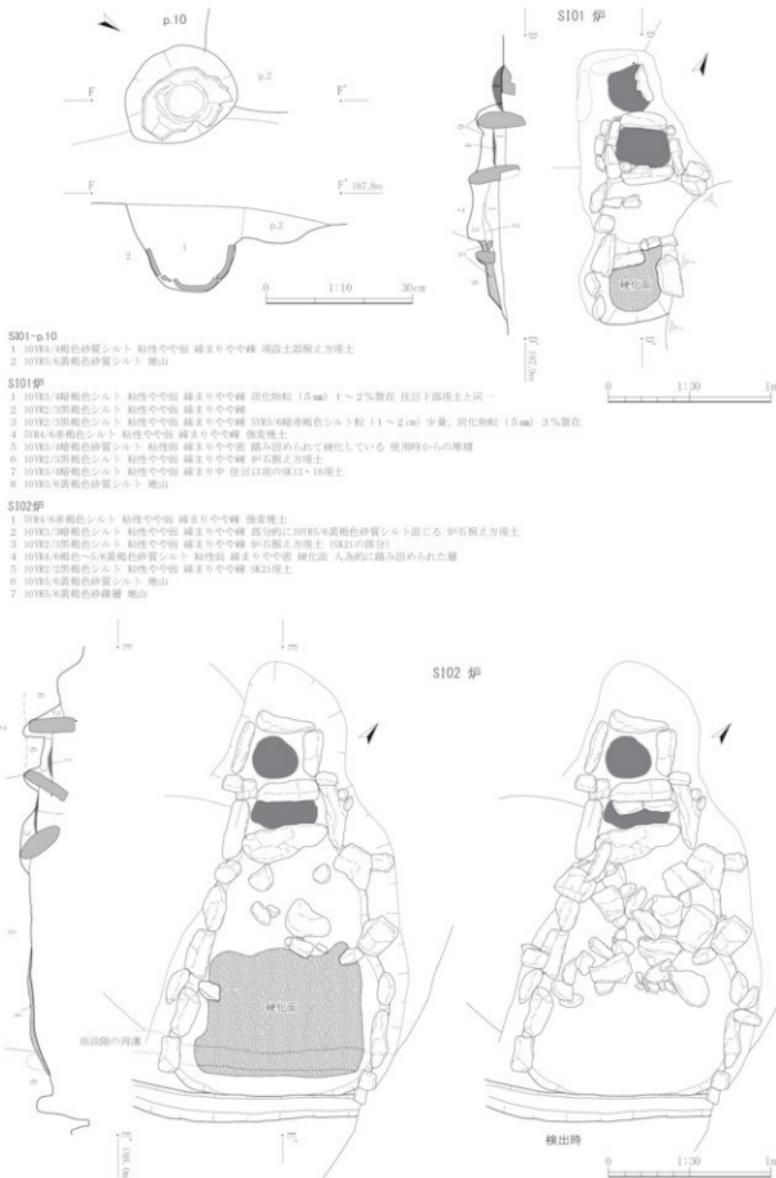
p.10や床面から出土した土器から、縄文時代中期末葉の大木10式古段階に所属すると考えられる。

##### SI02堅穴住居跡（第10・11図、写真図版4・5）

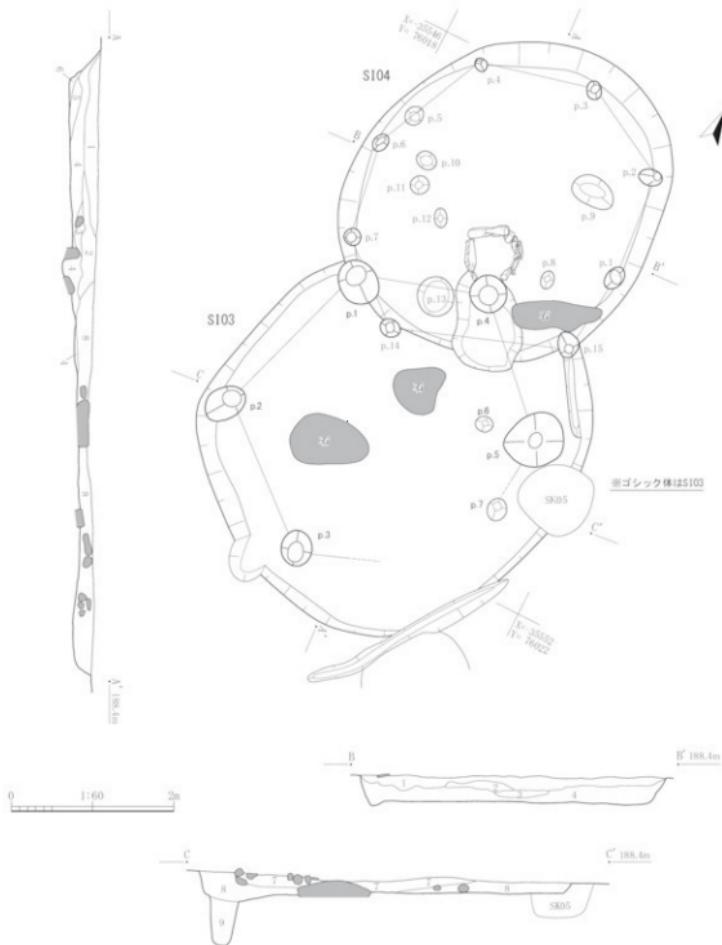
調査区東側のX=-35554・Y=76030付近に位置する。遺構の北西側でSK10と、遺構中央でSK17・21と重複し、これを切る。北東側は近年の搅乱により、また東側はNTT管埋設時に壊されている。北側に位置するSI01とは、断面Aから本遺構が旧期と観察される。規模・形状は、搅乱・重複により明らかでないが、推定で5.0×5.5mの略円形と考えられる。壁はほとんど捉えられないが、西側に一部残存している。西から南辺には深さ約10cmの周溝が残存しており、遺構範囲が推定できる。溝は、一部が二重に認められることから、拡張が行われたと見られる。床面はほぼ平坦であるが、東に向かってやや下がる。南側に複式炉を1基確認した。規模は2.3m×1.5mで、埋設した礫により4箇所に分けられる。北側の2箇所には強変焼土を検出したため、燃焼部と考えられる。南側の底面は広範囲に著しく硬化しており、住居の入口がこの箇所に存在した可能性がある。また、炉検出時に炉中央



第10図 SI01・02竪穴住居跡（1）



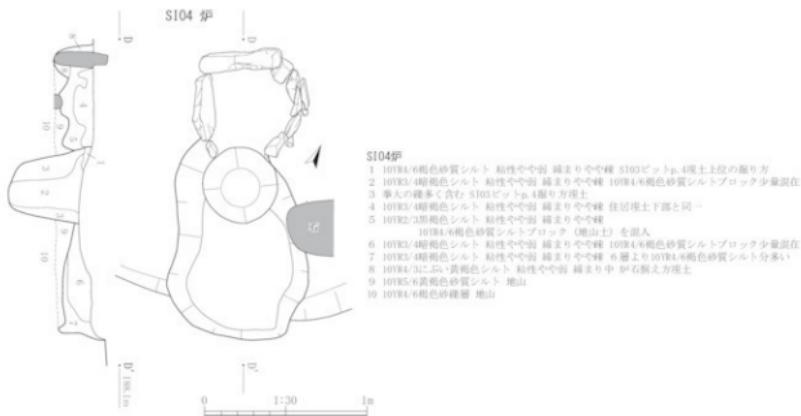
第11図 SI01・02堅穴住居跡（2）



SI03 • 04

1. 10R12/「湖緑色シルト」粘性やや弱 繼まりやや強  
 2. 10R12/「湖緑色シルト」粘性やや弱 繼まりやや強 腐化物物 (1~3 cm) 上面に多く堆積  
 3. 5R16/「湖緑色シルト」粘性やや弱 繼まりやや強 上面に腐化物物 (1~2 cm) 少量含む 10R13/「湖緑色シルト堆積 土被層 廊下に混入か  
 4. 10R12/「湖緑色シルト」粘性やや弱 繼まりやや強 上面に 1~2 cm で多く含む  
 5. 10R12/「湖緑色シルト」粘性やや弱 繼まりやや強  
 6. 10R12/「湖緑色シルト」粘性やや弱 繼まりやや強  
 7. 10R12/「湖緑色シルト」粘性やや弱 繼まりやや強 10R14/湖緑色シルト 全体に混在 混入土+廃棄物上  
 8. 10R12/「湖緑色シルト」粘性やや弱 10~20cmの深度 多量 人為的に投げ込まれたか、廃物も多く含む  
 9. 10R12/「湖緑色シルト」粘性やや弱 繼まりやや強 7 層よりは少ないが、多い  
 10. 記なし

第12図 SI03・04竪穴住居跡（1）



第13図 SI03・04堅穴住居跡（2）

付近には大量の礫が認められた。抜き取られた炉を構成する礫も含まれていると考えられ、住居を放棄する際に儀式的な行為を行った可能性がある。住居の主柱穴として、拡張前のp.7、p.10、p.18、p.33、p.37、拡張後のp.5、p.31、p.34などが挙げられる。これから、拡張後の柱穴状土坑は確認した複式炉と外側の周溝で構成される遺構プランが想定される。

炉内や床面から出土した土器から、SI01以前の縄文時代中期末葉の大木10式古段階に所属すると考えられる。

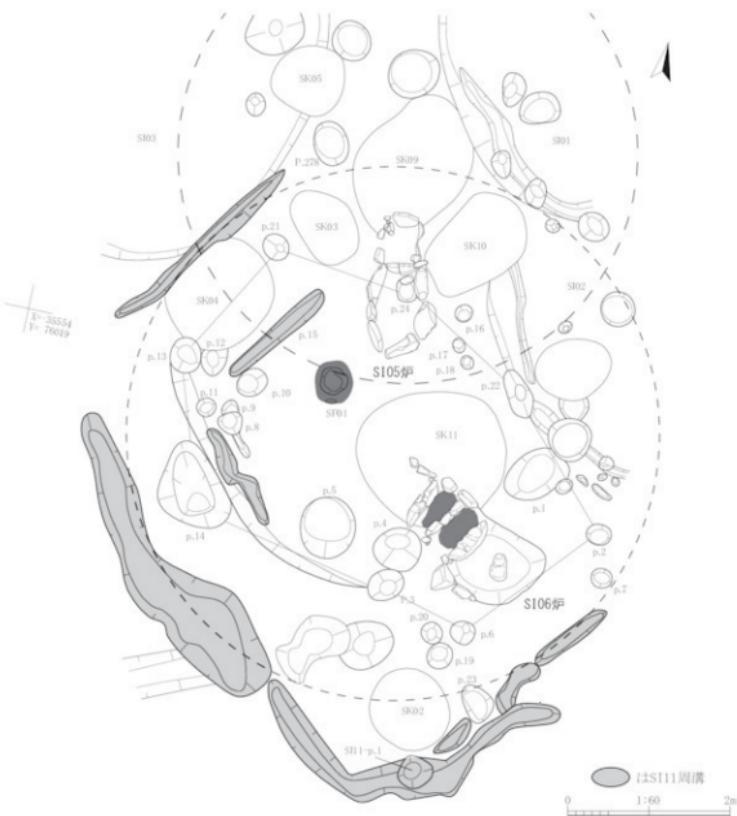
#### SI03堅穴住居跡（第12・13図、写真図版6）

調査区東側のX=-35552・Y=76022付近に位置する。遺構北側でSI03と重複するが、断面A及びSI04炉をSI03柱穴p.4が壊していることから、本遺構が新しいと判断される。また、東側でSK05と重複し、これを切る。規模・形状は4.7m×4.8mで、略円形を呈する。壁は約30cm残存しており、緩やかに立ち上がる形状である。床面はほぼ平坦であるが、地山に含まれる花崗岩巨礫が多数散見される。埋土上部の7層は、10~20cm大の礫や土器を多量に含んでおり、廃絶後に隣接する住居構築の際に排出された礫や遺物を投棄した可能性がある。住居の主柱穴として、p.1~p.5、p.7の6本が想定される。本遺構では、炉は確認されなかった。

床直上から出土した土器から、SI04以後の縄文時代中期後~末葉の大木9式新段階に所属すると考えられる。

#### SI04堅穴住居跡（第12・13図、写真図版7）

調査区東側のX=-35546・Y=76018付近に位置する。南側で、前述したSI03と重複し、本遺構が旧期にあたる。規模・形状は、4.0m×4.1mの略円形を呈する。壁は、重複するSI03側が切られているため少ないが、その他は深さ30cm以上残存しており、緩やかに立ち上がっている。床面はほぼ平坦であるが、南東側など地山に含まれる花崗岩巨礫が多数認められる。埋土3層には焼土層が形成されており、その上部の2層中には炭化物粒を多く含むことから廃絶後の堆積途中に何らかの作業が行われたと考えられる。南側に複式炉を1基検出した。規模は1.8m×0.9mで、礫を埋設した石開部と土坑状の前庭部に分けられる。石開部の底面には明瞭な被熱痕は認められなかったが、形状から見て燃焼



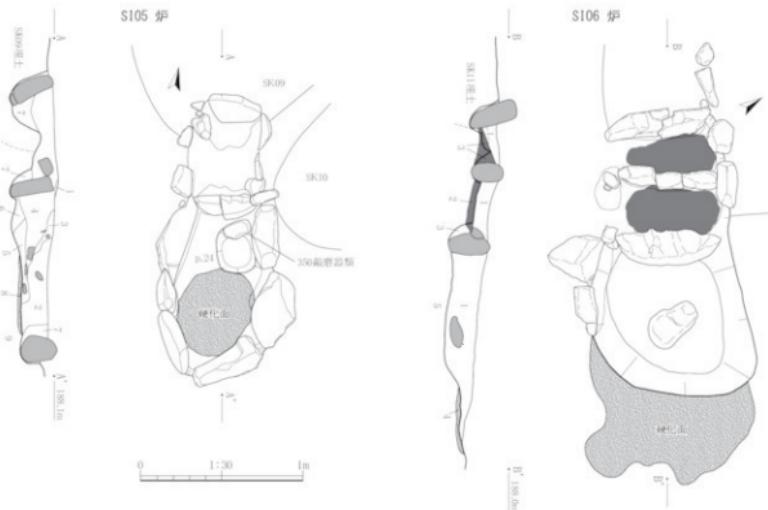
第14図 SI05・06竪穴住居跡、SI11竪穴建物跡（1）

部として利用されたと考えられる。石開部と前庭部の間にSI03のp.4が重複して切られているが、間仕切りの礫が存在したと見られる。前庭部は内壁に接しており、おそらく住居入口の機能を有していたと考えられる。壁際に住居の主柱穴として、p.1～p.4、p.6、p.7、p.14、p.15の8本を確認した。炉を挟んで、ほぼ対称に位置している。

埋土下位から出土した土器から、SI03以前の縄文時代中期後～末葉の大木9式古段階に所属すると考えられる。

#### SI05竪穴住居跡（第14・15図、写真図版8）

調査区東側のX=-35554・Y=76023付近に位置する。遺構が密集した箇所で検出したため、炉のみを確認した。SK09・10は炉と重複しており、切っている。遺構プランは、炉が南壁に接している形状と考えられるが、判然としない。ただし、床面にあるであろう柱穴の残り具合（SI02・03部分の柱穴は、すでに壊されている）から見て、SI02・03よりも古いと考えられる。炉は、2箇所の石開部を



## SI05#9

- 1 5103/3赤褐色シルト 粘性なし 繰まりなし
- 2 1003/2黒褐色シルト 粘性なし 繰まりやや緩 1005/6黄褐色地山ブロック (20mm) 廉焼物 (1~10mm) 南側に集中して混入
- 3 1002/2黒褐色シルト 粘性なし 繰まりなし 廉焼物 (1~20mm) イを埋め戻した後に流入した土
- 4 1003/3黒褐色シルト 粘性なし 繰まりなし 廉焼物 (1~5mm) 倭焼 片 (1~5mm) 地山ブロック (1~5mm) 廉焼後後に埋め戻した土
- 5 1003/4黒褐色シルト 粘性やや強 繰まりやや緩 廉焼物 (1~20mm) 地山ブロック (1~20mm) が使用時の堆積土
- 6 1004/4黒褐色シルト 粘性やや強 繰まりやや緩 廉焼物 (地山土と上層の土が混ざり合った土、またら SK09土)
- 7 1002/3黒褐色シルト 粘性やや弱 繰まりやや緩 破石屋と方塊土
- 8 1005/3黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 繰まりやや緩 廉焼物 (地山)
- 9 1005/6黄褐色砂質シルト 地山

## SI06#9

- 1 1002/3黒褐色シルト 粘性やや弱 繰まりやや緩 焼成部1・2には、崩落した混入小礫物粒 (5mm) 1~2cm、燒土粒が若干混じる。また、直土跡跡に伊石が若干散在した為、層位に乱れが生じている。
- 2 1004/6赤褐色シルト 粘性やや弱 繰まりやや緩 他焼物土
- 3 1003/4黒褐色シルト 粘性やや弱 繰まりやや緩 破石屋と方塊土
- 4 1005/6黄褐色砂質シルト 粘性やや弱 繰まりやや緩 硬化した層、地山が人為的に踏み固められている 地山か
- 5 1005/6黄褐色砂質シルト 地山

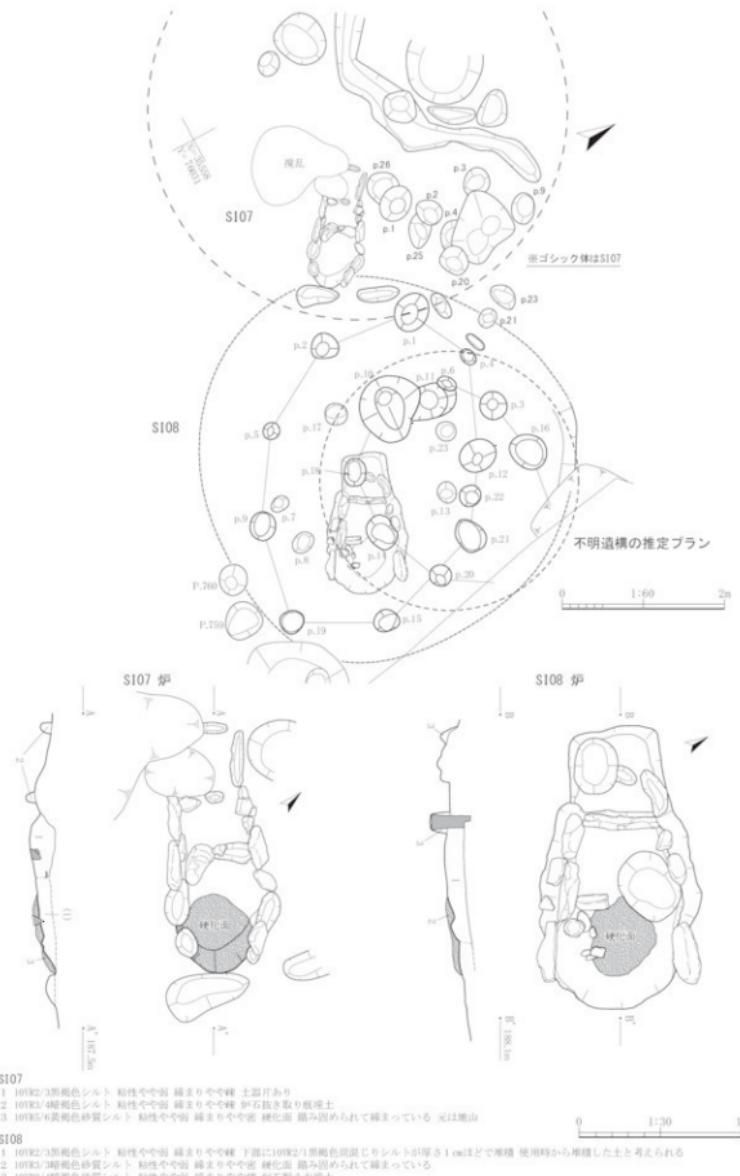
第15図 SI05・06竪穴住居跡、SI11竪穴建物跡（2）

持つ複式炉である。北側は、底面に焼成面を確認できないが燃焼部と考えられる。また、南側の石開部は、底面に硬化面を有することから、前庭部で住居外形に接する入口部分であったと考えられる。底面にあるp24は、SI05以前の柱穴と見られる。

炉内から出土した土器から、SI02・03以前の縄文時代中期後～末葉の大木9式新段階に所属すると考えられる。

## SI06竪穴住居跡（第14・15図、写真図版9）

調査区東側のX=-35556・Y=76024付近に位置する。SI05と同様に遺構が密集した箇所で検出したため、炉のみを確認した。SK11と直接重複しており、切っている。遺構プランは、これもSI05と同様に炉が南壁に接している形状と考えられる。これを想定すると、SI05と重複関係にあると考えられ、炉の位置からSI06がSI05よりも旧期と捉えられる。遺構プランは、同時期の住居から考えると円形～略円形と考えられる。規模は、推定で6m前後と見られる。この範囲内に、本遺構に伴うと思われる柱穴p.1~14・16~24の23個と、SK10に重複するピット1個を検出した。壁際を中心として、p.1~3・6・13・14・21・22などが主柱穴として考えられる。プラン南側に、複式炉を1基確認した。規



第16図 SI07・08竪穴住居跡

模は $2.2 \times 1.1\text{m}$ で、2箇所の石開部と1箇所の掘り込み部から構成される。2箇所の石開部底面に焼成面を確認したことから、燃焼部と捉えられる。掘り込みの深さは20cmくらいで、掘り込み部の南東側床面には硬化面が認められる。このことから、この箇所に住居外形に接する入口部分が存在した可能性が高い。

出土遺物が少ないが、SI05以前の縄文時代中期後～末葉の大木9式古段階に所属すると考えられる。

#### SI07竪穴住居跡（第16図、写真図版10）

調査区東側のX=-35558・Y=76031付近に位置する。遺構が密集した箇所で検出したため、炉のみを確認した。炉は複式炉で、南西側を後世の搅乱で破壊されており、石開部の一部を失っている。規模は $1.6 \times 0.7\text{m}$ 、2つの石開部と1つの掘り込み部からなる。石開部底面には焼成面が確認されなかつたが、燃焼部と考えられる。掘り込み部の南東側底面には硬化面が形成されており、遺構外形に接して住居入口が存在した可能性が高い。これから遺構プランを考えると、南側に残存する溝が壁際を巡る周溝と捉えられ、これらを含む $5 \sim 6\text{ m}$ の円形～略円形の規模・形状が想定される。推定プランから、南側のSI08と重複し、本遺構が新しいと考えられる。また、北側ではSI11と重複し本遺構が旧期、SI06とも重なると見られるが新旧は不明である。プラン内にp.1～4・9・20・25・26などがあり、本遺構に伴う可能性がある。

出土遺物が少ないが、SI08以後の縄文時代中期末葉に所属すると考えられる。

#### SI08竪穴住居跡（第16図、写真図版11）

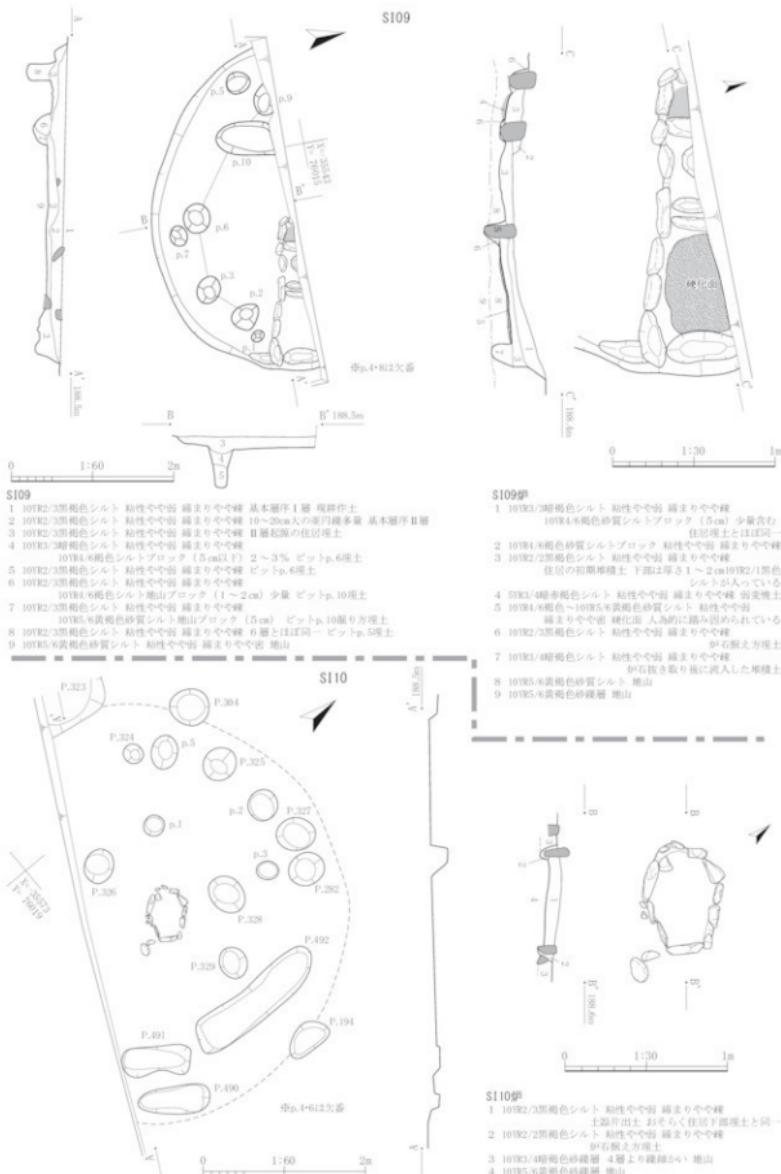
調査区東側のX=-35560・Y=76030付近に位置する。遺構が密集した箇所で、当初は炉のみを検出した。北側でSI07と重複し、切っている。炉は複式炉で、 $1.75 \times 1.0\text{m}$ の規模を持つ。重複する遺構により、石開部を失っている部分もあるが、2つの石開部と1つの掘り込み部からなる。石開部底面には重複する柱穴状土坑p.14・18もあり、焼成面は確認されなかつた。掘り込み部の底面には硬化面が形成されており、遺構外形に接して住居入口が存在した可能性が高い。遺構の立ち上がりは東側の一部のみ確認したが、炉と柱穴の位置から、 $4.5 \sim 4.7\text{ m}$ 前後の略円形プランが想定される。想定プラン内に、p.1～22の柱穴状土坑を確認した。前述の通り、p.14・18は炉と重複しており、炉を持つプランより新しい柱穴状土坑である。これらを含むp.3・6・10・16・20の7個は、本遺構より新しい2.5～3.0m前後の円形～略円形プランの遺構に伴うと考えられる。p.1・2・4・5・9・12・15・19・21は、本遺構を構成する柱穴と考えられ、楕円形に配置される。

炉内から出土した土器から、SI07以前の縄文時代中期末葉の大木10式古段階に所属すると考えられる。

#### SI09竪穴住居跡（第17図、写真図版12）

調査区東側の遺構密集箇所からやや離れたX=-35543・Y=76015付近に位置する。調査区境に接しており、北半は調査区外となる。規模・形状は、径4m前後の略円形を呈すると考えられる。床面はほぼ平坦、壁は10～20cmほど残存しており、緩やかに立ち上がる形状である。床面にはp.1～3・5～7・9・10の8個の柱穴状土坑があり、このうちp.1・2・3・6・9などが主柱穴にあたると考えられる。東側に複式炉を1基確認した。規模は $1.8 \times 0.6\text{m}$ 以上で、北半は調査区外へと続く。整然と並んでいる礫で構成された3つの石開部があり、西端の底面には焼成面が形成されており、燃焼部と捉えられる。また、東端の底面は人為的に踏み固められており、硬化面が形成されていることから、遺構外形に接して住居入口が存在した可能性が高い。廃絶時か、一部の礫は抜き取られている。

床面及び炉内から出土した土器から、縄文時代中期末葉の大木10式古段階に所属すると考えられる。



第17図 SI09・10堅穴住居層

**SI10豎穴住居跡（第17図、写真図版13）**

調査区南側のX=-35573・Y=76019付近に位置する。調査区境に接しており、南側は調査区外となる。検出時点で豎穴の立ち上がりは失われており、推定プランで径5.2m前後の略円形～楕円形の規模・形状と見られる。推定プラン中央に、石圓炉1基を検出した。規模は1.4×1.0mで、掘り窪めた側面に礫を並べて配置している。使用していると考えられるが、明確な焼成面は認められなかつた。床面はほぼ平坦で、周囲よりも若干凹んでいるように見える。床面からはp.1～3・5や、P.194・282・304・325～329・490・491の柱穴状土坑が確認されているが、整った柱穴配置は認められない。

柱穴から出土した土器から、縄文時代中期後～末葉の大木9式古段階に所属すると考えられる。

**SI12豎穴住居跡（第18図、写真図版14）**

調査区東側のX=-35543・Y=76025付近に位置する。遺構東側はNTT埋設管工事の際に破壊されている。また、南側は住宅の基礎で搅乱されている。遺構内でSK14・30と重複するが、いずれも本遺構より古い。規模・形状は、径3.1～3.5mの略円形と考えられる。床面はほぼ平坦であるが、床面西側は地山礫層が露出している。東側床面に複式炉1基を検出した。規模は、0.7×0.5mとやや小振りである。石圓部を2箇所有しており、西側は底面に焼成面が形成されており、燃焼部と分かる。東側は底面が人為的に踏み固められており、硬化面が確認されることから、遺構外形に接して住居入口が存在した可能性がある。炉のすぐ西側には上部のみが残存した壺形土器が床面に置いた正位の状態で出土した。下部を欠いた土器を何に使用していたかは不明である。床面から、p.1～10の柱穴状土坑を検出した。このうち、p.2は、西側で重複するSI14に伴う柱穴の可能性がある。その他の柱穴には、配置に規則性は認められない。

前述した炉西側床面から出土した土器などから、縄文時代中期末葉の大木10式古段階に所属すると考えられる。

**SI13豎穴住居跡（第18図、写真図版15）**

調査区南側のX=-35576・Y=76026付近に位置する。調査区境に接しており、南側は調査区外となる。検出時点で、豎穴の立ち上がりはほぼ失われており、周囲よりも凹む程度である。規模・形状は、径4.2m前後の円形～略円形と考えられる。床面はほぼ平坦であるが、地山に礫を多く含んでいる。遺構プラン内の床面に、p.1～10、P.223・224の柱穴状土坑を計12個検出した。規則的な柱穴配置ではなく、不明である。また、範囲内に炉は確認できなかつた。今回の調査区から外れる南側に存在するかもしれない。

遺構からは遺物がほとんど出土せず不明だが、周辺遺構の規模や形状と似通っていることから、縄文時代中期後～末葉に所属する可能性がある。

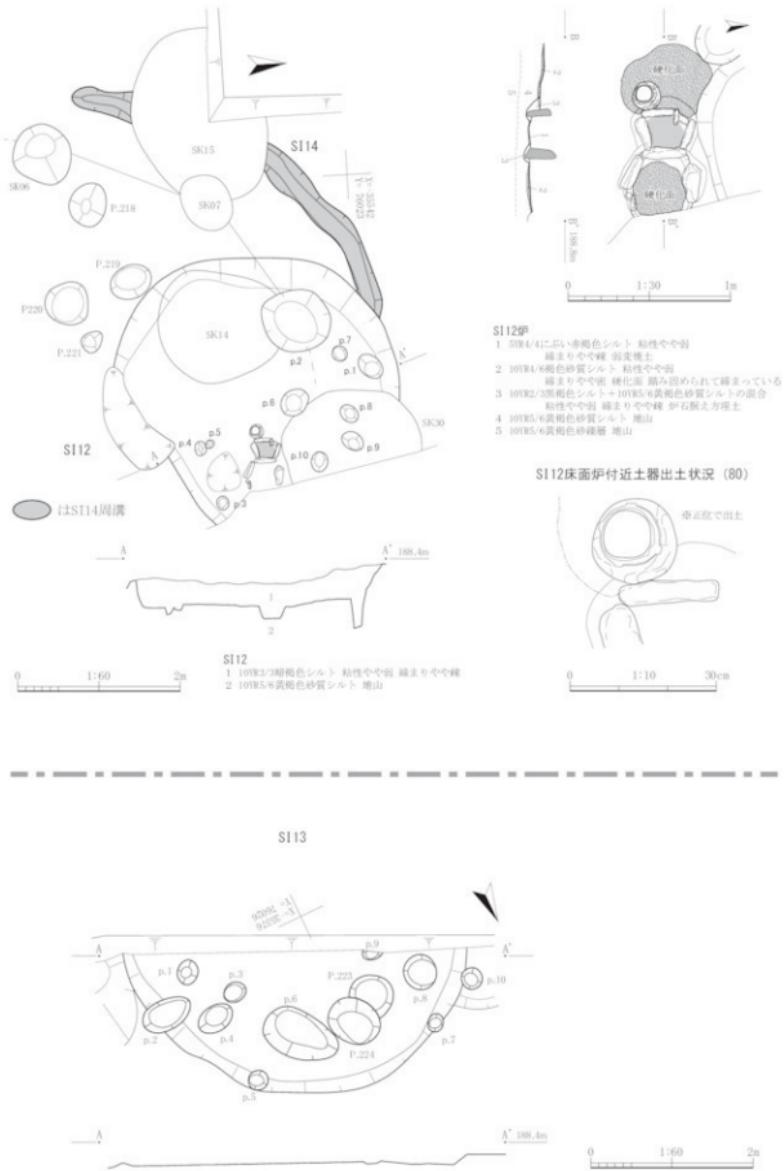
**SI14豎穴住居跡（第18図、写真図版15）**

調査区東側のX=-35542・Y=76023付近に位置する。調査区際で検出しており、全形は知り得ない。東側でSI12と重複しており、切られている。また、周溝がSK15に切られていることから、これよりも古い。検出したのは、遺構北側の周溝のみで、遺構プランは不明であるが、もし周溝の径が円形であるなら、8m前後が想定される。柱穴は決め手に欠けるが、配置からSK06・07・SI12p.2が挙げられる。想定したプラン内には、炉は確認できなかつた。

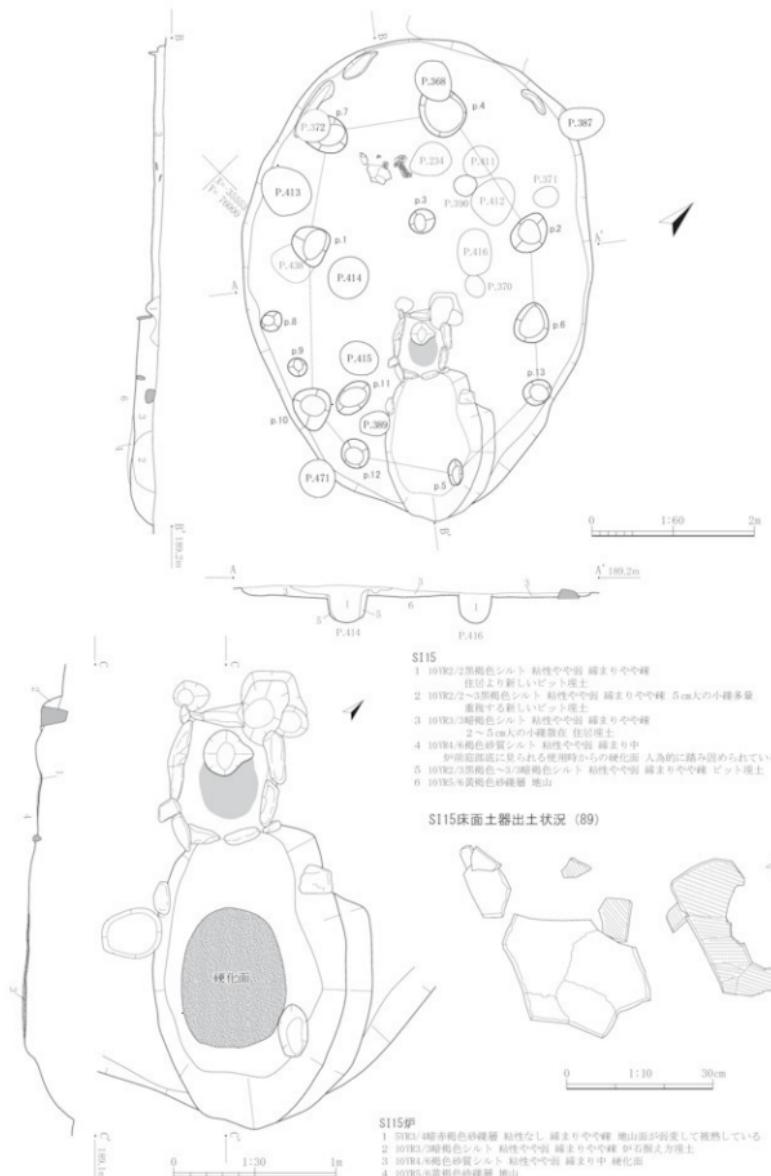
周溝内から出土した土器から、縄文時代中期後～末葉の大木9式古段階に所属する可能性がある。

**SI15豎穴住居跡（第19図、写真図版16）**

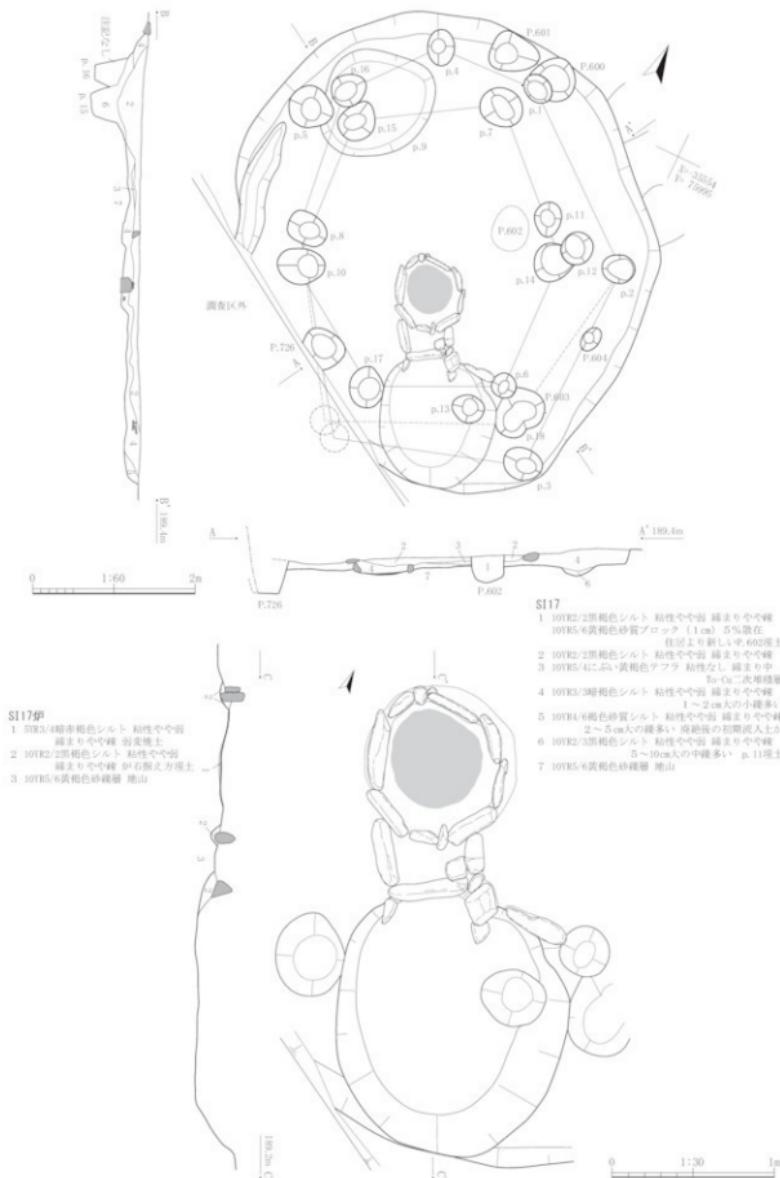
調査区中央のX=-35553・Y=76000付近に位置する。複数の柱穴状土坑に切られているが、いずれも本遺構より新しい。規模・形状は、長軸5.9m×短軸4.5mの楕円形を呈する。床面はほぼ平坦であ



第18図 SI12~14竪穴住居跡



第19図 SI15堅穴住居跡



るが、砂礫層上面に造構が構築されているため、地山の床面に礫が多数散在する。壁の立ち上がりはあまり残存していないが、床面から緩やかに立ち上がる形状である。埋土には2~5cm大の小礫が多数散在している。床面から、p.1~13の柱穴状土坑を計13個検出した。このうち、主柱穴はp.1・2・4~7・10~13の計10個と考えられる。また、床面南東側に複式炉1基を検出した。規模は2.6×1.3mで、1つの石開部と1つの掘り込み部からなる。石開部の底面には焼成面が形成されており、燃焼部と捉えられる。掘り込み部の底面は褐色に硬化しており、人為的に踏み固められた痕跡と考えられる。北側床面からは、89深鉢が潰れた状態で出土した。

床面や炉から出土した土器から、縄文時代中期後~末葉の大木9式古段階に所属すると考えられる。

#### SI17竪穴住居跡（第20図、写真図版17）

調査区西側のX=-35554・Y=75995付近に位置する。柱穴状土坑P.600~604・726に切られている。調査区境に接しており、南西側は調査区外へと続く。規模・形状は、長軸6.0m×短軸5.3mの楕円形を呈する。床面はほぼ平坦であるが、SI15と同様に砂礫層上面に造構が構築されているため、地山の床面に礫が多数散在する。北西壁の一部に周溝が巡るが、他には確認されず、壁は床面から緩やかに立ち上がる形状である。埋土中位の3層にぶい黄褐色のTo-Cuテフラ二次堆積が認められた。周辺から流入したものと考えられる。他に、埋土中には流入した小礫が多く含まれる。床面から、p.1~8・10~18の柱穴状土坑計17個と、p.9床面土坑1基を検出した。柱穴配置から、p.6・7・8・11・14・15・17の7個と、p.1~4・10・16・18の7個のまとまりがあり、前者から後者へ拡張が行われたと考えられる。南側の床面には、複式炉が1基設けられている。規模は2.9×1.4mと大きく、2つの石開部と1つの掘り込み部からなる。北側の円形の石開部底面には、焼成面が広がっており、燃焼部と考えられる。また、掘り込み部は深さ30cm弱掘り込まれており、底面が砂礫層のため硬化面は形成されていないが、住居外形に接して入口が存在していたと考えられる。

埋土下位から出土した土器から、縄文時代中期後~末葉の大木9式古段階に所属すると考えられる。

#### SI18竪穴住居跡（第21図、写真図版18）

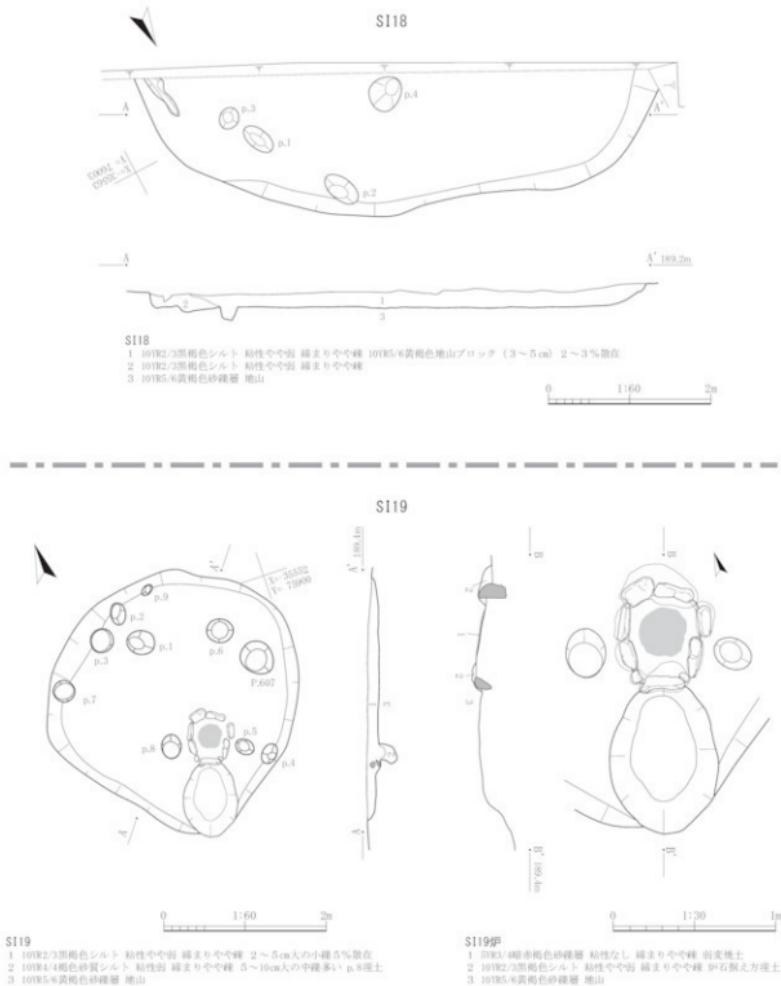
調査区西側のX=-35563・Y=76003付近に位置する。調査区境に接しており、南側は調査区外へと続く。規模は、調査区際で約6.5mあるが全形の1/3~1/4ほどの検出と考えられるため、もう少し大きいかもしれない。形状は、検出した部分から円形~略円形と考えられる。床面はほぼ平坦であるが、砂礫層を掘り込んで造構が構築されているため、地山の床面に礫が多数散在する。東側の一部には周溝が認められる。壁は床面から緩やかに立ち上がっている。床面から、p.1~4の計4個の柱穴状土坑を検出したが、配置に規則性は認められない。

埋土から出土した土器から、縄文時代中期後~末葉の大木9式古段階に所属すると考えられる。

#### SI19竪穴住居跡（第21図、写真図版18・19）

調査区西側のX=-35552・Y=75900付近に位置する。造構北西側で、P.607が切っている。規模・形状は、3.3×3.2mの不整円形を呈する。床面はほぼ平坦ではあるが、砂礫層上面に造構が構築されているため、地山の床面に礫が多数散在する。黒褐色シルトの埋土中には、2~5cm大の小礫が多数散在している。床面から、p.1~9の柱穴状土坑9個を検出した。配置に規則性は認められないが、主柱穴にはp.1・4・6・8などが用いられている。南側の床面には、複式炉が1基設けられている。規模は1.6×0.7mで、北側に石開部と南側に掘り込み部からなる。石開部の底面には焼成面が形成されており、燃焼部と捉えられる。住居外形に接していることから、入口が存在した可能性がある。

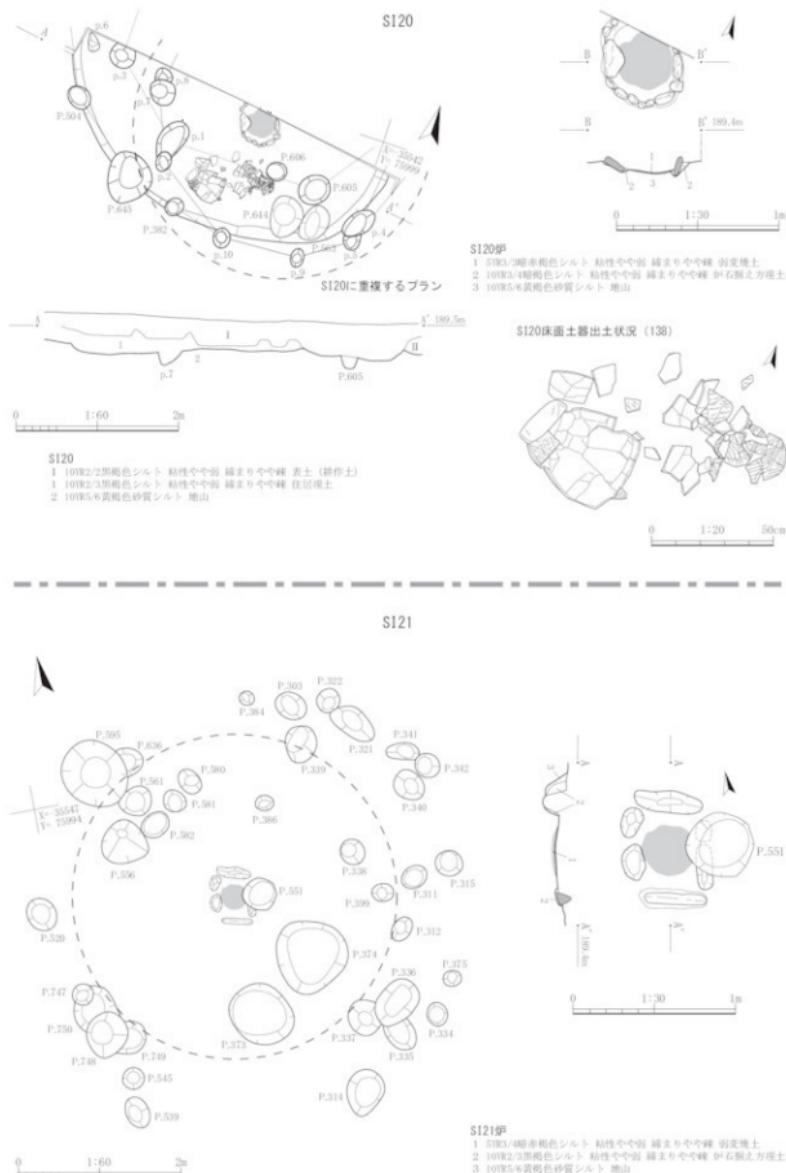
炉内から出土した土器から、縄文時代中期末葉の大木10式古段階に所属すると考えられる。



第21図 SI18・19竪穴住居跡

**SI20堅穴住居跡（第22図、写真図版20）**

調査区中央のX=-35542・Y=75999付近に位置する。調査区境に接しており、北半は調査区外となる。規模は、調査区界で約4.2mあるが全形の1/2~1/3の検出と考えられるため、もう少し大きい可能性がある。形状は、検出した部分から円形~略円形と考えられる。床面はほぼ平坦で、黄褐色砂質シルトの地山で構成される。壁は床面から緩やかに立ち上がる形状である。床面及び周辺から、p.1



第22図 SI20・21竪穴住居跡

～10、P.382・504・563・605・606・644・645の柱穴状土坑17個を検出した。想定される柱穴配置から、p.1・3・P.605の計3個とp.2・5・8～10の計5個のまとまりが捉えられる。前者は拡張後、後者は拡張前の遺構プランと考えられる。床面の中央やや南側から石窓炉1基を検出した。北側の一部が調査区外となるが、規模は約1.1×1.0mと見られる。底面には焼成面が形成されており、暗赤褐色に被熱している。また、炉の南側床面からその場で壊れた状態の土器137・138が出土した。

床面から出土した土器から、縄文時代中期後～末葉の大木9式古段階に所属すると考えられる。

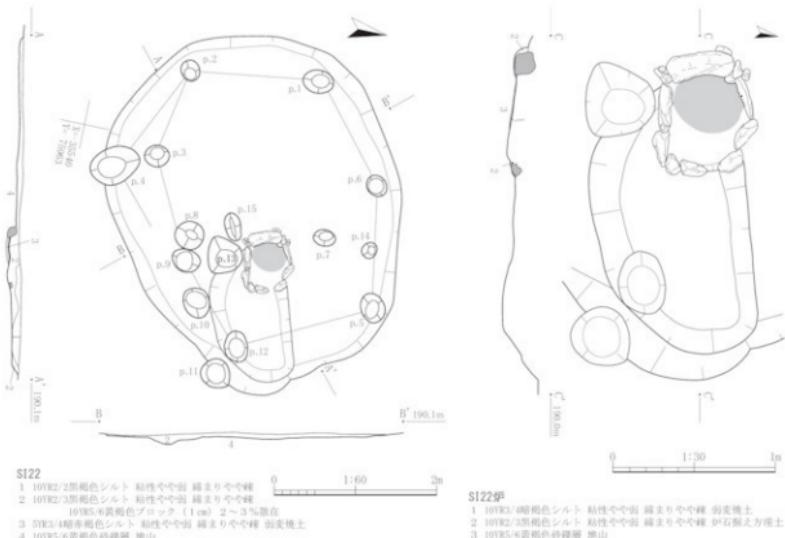
#### SI21豎穴住居跡（第22図、写真図版21）

調査区中央のX=-35547・Y=75994付近に位置する。検出段階で遺構プランは確認できず、炉のみを検出した。周辺には柱穴状土坑を多数確認しているが、本遺構に伴う柱穴を抽出するのは困難である。石窓炉1基を検出した。規模は0.7×0.6mで、南北に長軸がある。炉を構成する礫は、南側のみ残存しており、ほかは失われている。炉底面には弱変燃土が認められる。

出土遺物がなく不明だが、隣接する石窓炉を持つSI20があるため、縄文時代中期後～末葉に所属する可能性もある。

#### SI22豎穴住居跡（第23図、写真図版22・23）

調査区西側のX=-35540・Y=75963付近に位置する。SI23と西側で隣接する。規模・形状は、4.4×3.6mの楕円形を呈する。黄褐色砂礫層で構成される床面はほぼ平坦であるが、砂礫層上面に遺構が構築されているため、地山の床面に礫が多数散在する。遺構の立ち上がりはほとんど捉えられないが、壁は緩やかに立ち上がる形状と考えられる。床面から、p.1～15の柱穴状土坑計15個を検出した。このうち、p.1～3・5・6・9・12の計7個と、これに加えて東側に拡張を行ったp.4・10が主柱穴と考えられる。床面の東側に複式炉1基を検出した。規模は、1.9×1.0mで、西側の石窓部と東側の掘り込み部とからなる。石窓部の底面に焼成面が形成されており、弱変色している。掘り込み部はかな



第23図 SI22豎穴住居跡

り浅く、深いところで15cm、浅いところだと床面とはほぼ変わりない。もしかしたら、炉としての範囲は石開部のみの可能性がある。

炉前庭部から出土した土器から、縄文時代中期後～末葉の大木9式古段階に所属すると考えられる。  
**SI23竪穴住居跡（第24図、写真図版24）**

調査区西側のX=-35537・Y=75967付近に位置する。SI22と東側で隣接する。規模・形状は、拡張前が4.0×3.4mの長方形、拡張後が約5.0×4.5mの円形～楕円形で南側は調査区外となる。床面はほぼ平坦で、黄褐色砂質シルトと部分的に地山砂礫層で構成される。遺構の立ち上がりはほとんど確認できないが、緩やかに立ち上がる形状と考えられる。遺構北側の床面に接する部分にTo-Cuテフラ二次堆積層が流入しているのを確認した。床面から、p.1～9の柱穴状土坑計9個と、拡張後のプランとして東側のP.654・655・657・658・659・700の計6個が加えられる。拡張前はコーナーを持つ長方形プランであったが、拡張後には円形基調を作り替えていると見られる。床面のほぼ中央に石開炉1基を検出した。規模は0.8×0.7mで、底面には弱変した焼土層を持つ。床面西側の調査区境付近から土器144などが出土した。その場で壊れた状態で見つかっており、本遺構に伴うと考えられる。

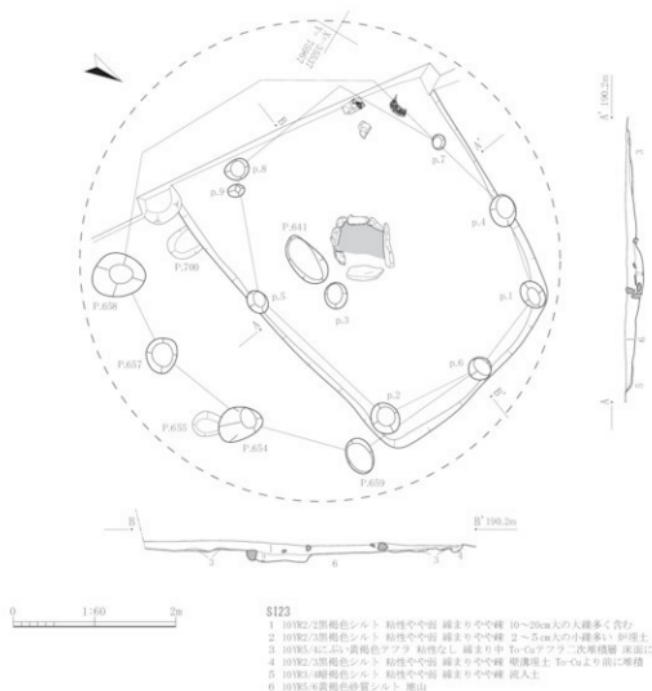
炉内や床面に出土した土器から、縄文時代中期後～末葉の大木9式新段階に所属すると考えられる。  
**SI28竪穴住居跡（第25図、写真図版25）**

調査区西側のX=-35538・Y=75970付近に位置する。SI22の東側に隣接している。調査区境に接しており、北半は調査区外となる。規模・形状は、調査区際で約5.5mあり、円形～楕円形の形状が調査区外に1/2程度拡がると考えられる。床面はほぼ平坦で、地山の薄い黄褐色砂質シルト層の下から砂礫層の礫が多数露出している。遺構の立ち上がりは平面では捉えられないが、調査区境の断面から20cm弱は緩やかに立ち上るがと見られる。遺構の掘り込みは、基本層序Ⅲ層から行われている。推定される遺構範囲内から、p.1～8・10の柱穴状土坑計9個を検出した。このうち、主柱穴はp.1・4～6・8の計5個で、炉を中心に巡っている。中央に石開炉を1基検出した。炉の北半は調査区外へと続く。規模は推定で0.6×0.6mで、掘り窪められた底面には強変する焼成面が形成されている。西側床面のp.7付近から土器155が一括で出土した。

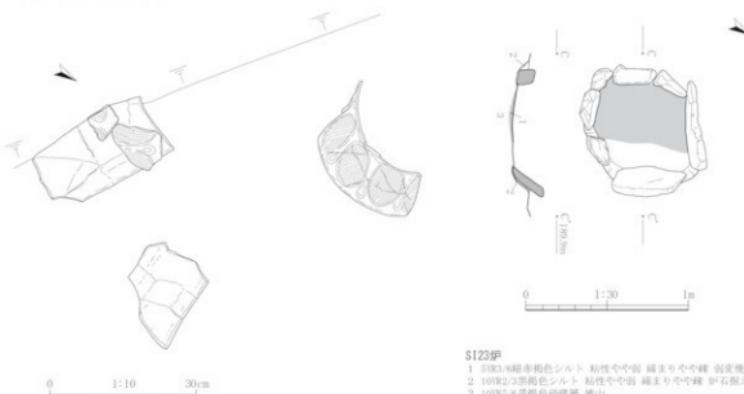
床面から出土した土器から、縄文時代中期後～末葉の大木9式新段階に所属すると考えられる。  
**SI29竪穴住居跡（第25図、写真図版26）**

調査区東側の現道部分X=-35551・Y=76032付近に位置する。南東側でSK37、北西側でSK38、床下にSK43と重複しているが、いずれも本遺構が切っている。また、西側に近年埋設したNTTケーブル管があり、工事の際に大きく破壊されている。規模・形状は、約3.1×2.7mと小振りで、略円形を呈する。床面はほぼ平坦だが、皿状に中央に向かって若干傾斜している。壁はほぼ残存していないが、開き気味の形状である。埋土中の5層に炭化物層、その直上の4層に強変した焼土層、その上の1・3層中には炭化物粒を多く含むことから、火災によって焼失した住居と考えられる。床面から、p.1～10の柱穴状土坑計10個を検出した。このうち、p.1・2・4・6・8の計5個が主柱穴と捉えられ、擾乱部分にも2個の柱穴が存在し、全体で7本柱だった可能性がある。南壁寄りに複式炉1基を検出した。規模は、推定で1.5×0.6mで、凹んだ焼上面と2つの石開部を有する。焼上面は石開部の北西に接してあり、強変焼土が形成されている。また、石開部の底面にも弱変焼土があり、この2箇所が燃焼部と捉えられる。掘り込み部は途中まで礫が設置されており、底面は人為的に踏み固められており硬化面が形成されている。のことから、遺構外形に接するこの箇所に住居の入口施設が存在した可能性がある。

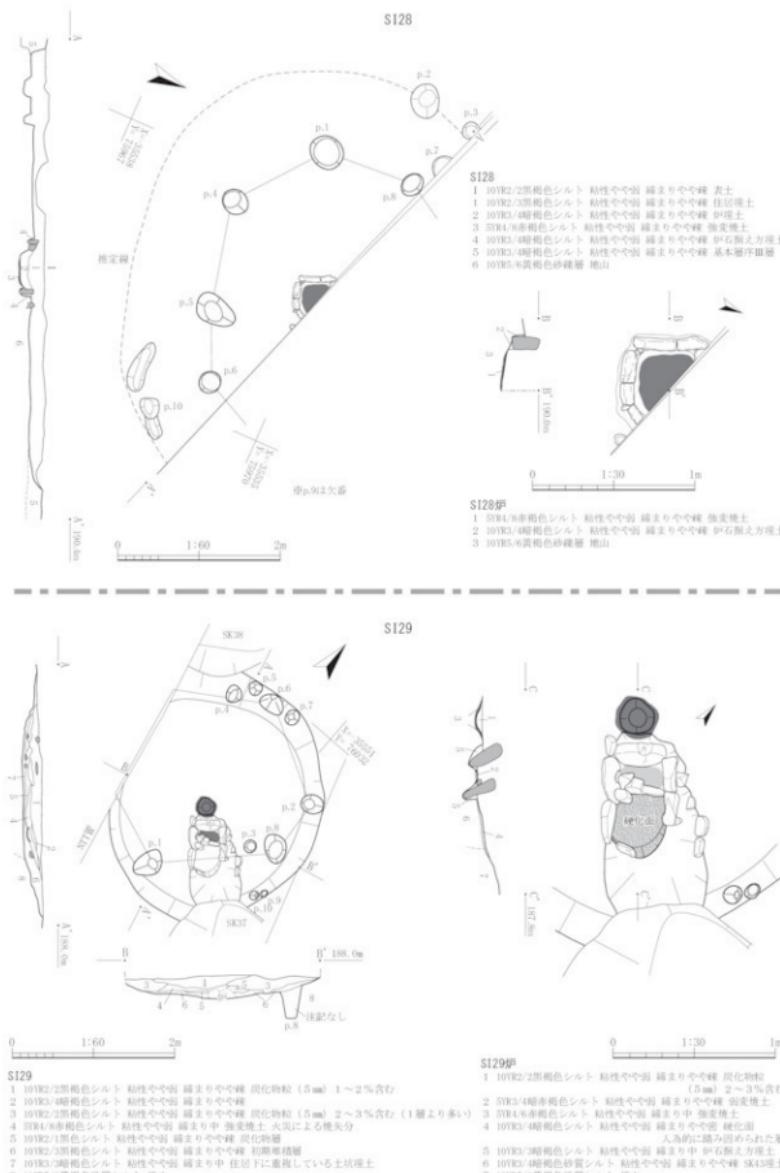
埋土中から出土した土器から、縄文時代中期末葉の大木10式古段階に所属すると考えられる。



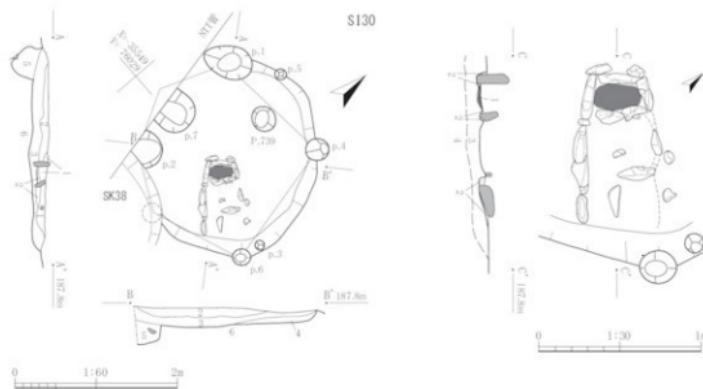
床面土器出土状況 (144)



第24図 SI23竪穴住居跡



第25図 S128・29堅穴住居跡



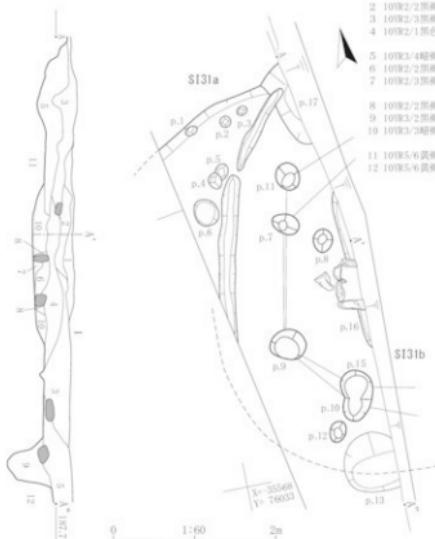
## SI30

- 1 10TR2/3褐褐色シルト 粘性やや弱 織まりやや疊へ中
- 2 10TR3/3褐褐色シルト 粘性やや弱 織まりやや疊へ中
- 3 10TR3/4褐褐色シルト 粘性やや弱 織まりやや疊へ中
- 4 10TR3/5褐褐色シルト 粘性やや弱 織まりやや疊へ中
- 5 10TR3/6褐褐色シルト 粘性やや弱 織まりやや疊へ中
- 6 10TR5/5黄褐色シルトブロック (1cm) 少量 5~10cm大の中織少量
- 6 10TR5/6黄褐色砂質シルト 地山

## SI30p

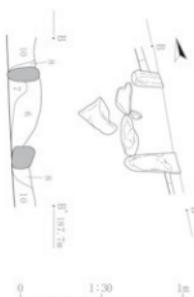
- 1 10TR4/6赤褐色シルト 粘性やや弱 織まりやや疊 強度地上
  - 2 10TR3/4褐褐色シルト 粘性やや弱 織まり中 岩石板え方理土
  - 3 10TR4/6褐褐色シルト 粘性やや弱 織まり中 砂疊か
  - 4 10TR2/3褐褐色シルト 粘性やや弱 織まり中
- 砂疊は岩板え方理土の上にあり、かくら15cm程度上にのっていることから、  
突出したかくらは岩板え方理土上に構築された最終凹陥の跡と捉えられる。  
跡印は確認できなかった。

## SI31



## SI31 (内共通)

- 1 表土 植被下砂石層 (厚さ50cm)
  - 2 10TR2/1黒褐色シルト 粘性やや弱 織まりやや疊へ中 5~10cm大の块状少含む
  - 2 10TR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 織まりやや疊へ中
  - 3 10TR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 織まりやや疊へ中
  - 4 10TR2/1黒色シルト 粘性やや弱 織まりやや疊へ中 遊物多量に含む
  - 5 10TR3/4黒褐色シルト 粘性やや弱 織まりやや疊へ中
  - 6 10TR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 織まりやや疊へ中
  - 7 10TR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 織まりやや疊へ中
- 10TR5/6黄褐色砂質シルトとの混合土
- 8 10TR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 織まりやや疊 岩石板え方理土
  - 9 10TR2/2黒褐色シルト 粘性やや弱 織まりやや疊へ中 岩石板え方理土多く含む ピッカ 13塊土
  - 10 10TR2/3黒褐色シルト 粘性やや弱 織まりやや疊 10TR5/6黄褐色砂質シルトブロック (5cm以下) 全体に散在 かくらよりも古いピッカ 16塊土
  - 11 10TR5/5黄褐色砂質シルト 地山
  - 12 10TR5/6黄褐色砂質層 地山



第26図 SI30・31堅穴住居跡

**SI30竪穴住居跡（第26図、写真図版27）**

調査区東側の現道部分X=-35549・Y=76029付近に位置する。南側でSK38と重複するが、本遺構が切っている。また、西側に近年埋設したNTTケーブル管があり、工事の際に大きく破壊されている。規模・形状は、推定で約2.4mの略円形を呈する。規模が小振りで、隣接するSI29と似通っている。床面はほぼ平坦だが、皿状に中央に向かって若干傾斜している。また、本遺構は掘削した後に床面全体に褐色土で厚さ15cmの貼床が施されており、この面の上に炉が構築されている。掘り方には痕跡がなかったが、住居を作り替えた際に貼床などを行ったのかもしれない。床面から、p.1~7とP.739の柱穴状土坑計8個を検出した。このうち、p.1~4・6・7の計6個が主柱穴と考えられる。南東側から複式炉1基を検出した。失われている部分もあるが、3つの石圓部が作られており、北西端の底面には強変焼土の焼成面が形成されている。他遺構と同様に、遺構外形に接する箇所は住居の入口施設の可能性がある。

炉から出土した土器や、SI29との共通性から縄文時代中期末葉の大木10式古段階に所属すると考えられる。

**SI31竪穴住居跡（第26図、写真図版28）**

調査区東側の現道部分X=-35568・Y=76033付近に位置する。東側は現道下の調査区外へと続き、また西側はU字側溝とNTTケーブル埋設工事により破壊されている。SI31は検出された周溝と北側遺構プランが異なるため、2棟が重複している可能性がある。遺構プランの住居をSI31a、周溝プランの住居をSI31bと考える。新旧関係は不明であるが、炉の位置からSI31aが新しいと想定される。よって、検出している炉はSI31aのもので、SI31bの炉はSI31a構築時に破壊していなければ、調査範囲外に存在する可能性がある。SI31aは推定で5m前後の円形から略円形、SI31bは東側の調査区境で約5m残存しており、調査区外に2/3以上存在すると考えられる。形状は略円形から稍円形を呈すると考えられる。床面はほぼ平坦だが、SI31aに伴うと見られる炉の下部には凹みがある。床面には、SI31aまたはbのいずれかに属するp.1~13・15・16の柱穴状土坑計15個を検出した。柱穴配置から、p.7・9・15と、p.9~11のまとまりが推定できるが、遺構の形状からSI31bに伴うものと考えられる。p.6や12は、配置からSI31aの柱穴の可能性がある。p.16は、SI31a炉の下部に存在することから、SI31bに属すると見られる。調査区にSI31a炉と考えられる石圓炉1基を検出した。形状は方形と見られ、規模は一辺が0.6m前後である。底面に明確な焼成面は形成されていない。

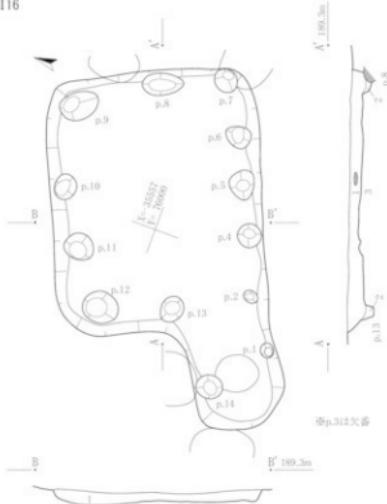
出土した土器は埋土中でどちらに含めるか難しいが、SI31aは縄文時代中期後～末葉の大木9式新段階、SI31bは大木9式古段階と考える。

**(2) 竪穴建物跡****SI11竪穴建物跡（第14図、写真図版29）**

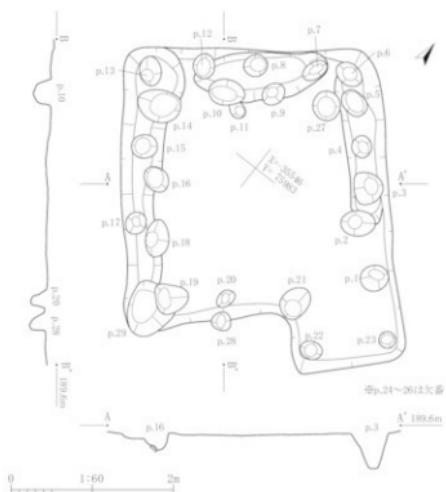
調査区東側のX=-35554・Y=76019付近に位置する。方形に巡る周溝のみを確認した遺構である。SI03・05~07、SK02・04などと重複しているが、本遺構が新しい。周溝プランは二重に検出しており、外側をSI11a、内側をSI11bとする。規模はSI11aが一辺約7m、SI11bが一辺約5.4mである。いずれも東側に傾斜する面に築かれているため、標高の高い南北辺及び西辺の周溝のみが残存している。周溝の深さは10~20cmで、SI11bの方が幅が狭い。柱穴状土坑はプラン内に多数確認しているが、どれが本遺構に伴うか不明である。

周溝南辺から確認した遺物は、縄文時代中期後～末葉の大木9式古段階に比定されるが、遺構の形状からこれよりも新しい中世に属すると考えられる。

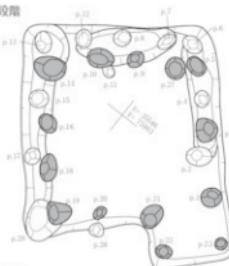
SI16



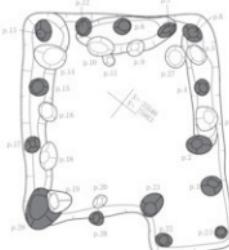
SI24



第1段階



第2段階



第27図 SI16・24堅穴建物跡

**SI16竪穴建物跡（第27図、写真図版30）**

調査区中央のX=-35557・Y=76000付近に位置する。隅丸長方形プランの南西側に張り出しを持つ遺構である。規模は3.2×2.6mで、1.2×1.1mの張り出し部分を持つ。床面はほぼ平坦だが、砂礫層上面に遺構が構築されているため、地山の床面に礫が多数散在する。張り出し部分の床面は外から内へと緩やかに下る。壁はほとんど残存していないが、緩やかに立ち上がる形状と考えられる。床面の壁際に、p.1・2・4～14の柱穴状土坑計13個を検出した。隅丸長方形の遺構形状に対応して、配置されている。張り出し部分にはp.1・14の2個があり、入口上屋を支えていたと見られる。

縄文土器を出土しているが、遺構形状から中世に所属すると考えられる。

**SI21竪穴建物跡（第27図、写真図版29）**

調査区西側のX=-35546・Y=75983付近に位置する。西側約2mにSI25が隣接する。隅丸方形プランの南東側に張り出しを持つ遺構である。規模は3.3×3.3mで、0.8×1.4mの張り出し部分を持つ。床面はほぼ平坦だが、砂礫層上面に遺構が構築されているため、地山の床面に礫が多数散在する。壁は残存していない。床面の壁際に、p.1～23・27～29の柱穴状土坑計26個を検出した。柱穴配置から、p.1・3・5・9・10・14・16・18・19～23・27の計14個と、p.2・4・6～8・12・13・15・17・22・23・28・29の計13個のまとめがある。前者が内側、後者が外側に位置することから拡張・建て替えが行われたと考えられる。p.22・23は張り出し部分にある柱穴で、両者で共通する。入口上屋を支えていたと見られる。

柱穴状土坑から縄文土器を出土しているが、遺構形状から中世に所属すると考えられる。

**SI25竪穴建物跡（第28図、写真図版31）**

調査区西側のX=-35546・Y=75978付近に位置する。東側約2mにSI24が隣接する。南西側でSI26と重複するが、先後関係は不明である。遺構形状は、隅丸方形を呈する。規模は3.6×3.6mだが、南西側はプランが不明確で柱穴位置から推定される。検出した方形プランの北東側にp.9とp.11の柱穴状土坑2個があり、掘り込みは確認されなかつたが張り出し部分を持つ可能性もある。床面はほぼ平坦だが、砂礫層上面に遺構が構築されているため、地山の床面に礫が多数散在する。壁際に柱穴が存在するため、方形プランが確認できるが、遺構埋土はほとんど残存していない。壁際には、p.1～8・10・18の柱穴状土坑計10個が確認された。方形プラン部分は2×4間、張り出し部分は1×1間となる。床面中央に0.45×0.4mの略円形の弱変焼土を検出した。位置から、本遺構に伴うものと判断した。

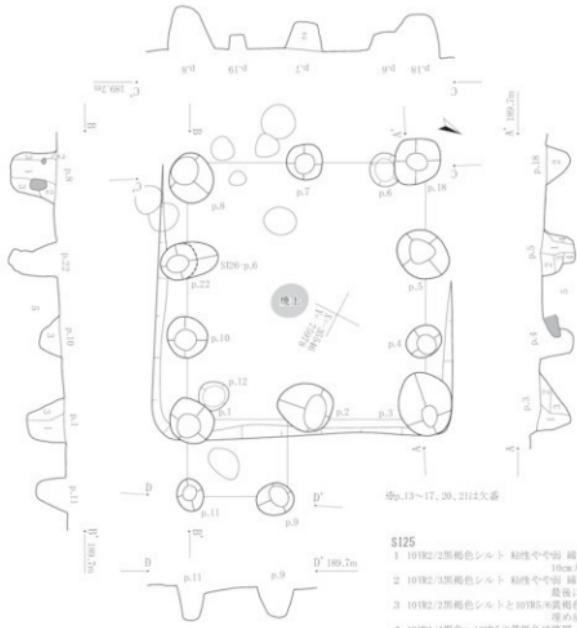
柱穴状土坑から縄文土器を出土しているが、遺構形状から中世に所属すると考えられる。

**SI26竪穴建物跡（第28図、写真図版32）**

調査区西側のX=-35549・Y=75976付近に位置する。北東側でSI25と重複するが、先後関係は不明である。規模・形状は、大半が調査区外へと続くため不明だが、長軸4.5mで方形から長方形を呈すると考えられる。遺構の掘り込みは認められず、柱穴が並列して確認されている。このことから、掘立柱建物跡の可能性もあるが、長軸規模が隣接するSI25などとはほぼ同規模のため、竪穴建物跡とした。床面はほぼ平坦と見られるが、重複するSI25部分は掘り込まれている。砂礫層上面に遺構が構築されているため、地山の床面に礫が多数散在する。壁際に柱穴が存在するため、プランが確認できるが、遺構埋土はほとんど残存していない。壁際には、p.1・2・5・7・9・10・12～14、SI25p.13・17・21の柱穴状土坑計12個を検出した。方形から長方形プランは2以上×4間で、調査区外に張り出しを有する可能性もある。調査区境を抜けた際に鉄錆1点が出土した。

柱穴状土坑から縄文土器を出土しているが、遺構形状から中世に所属すると考えられる。

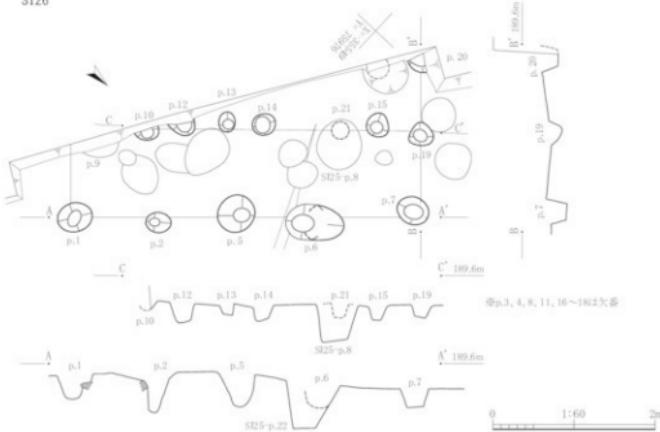
S125



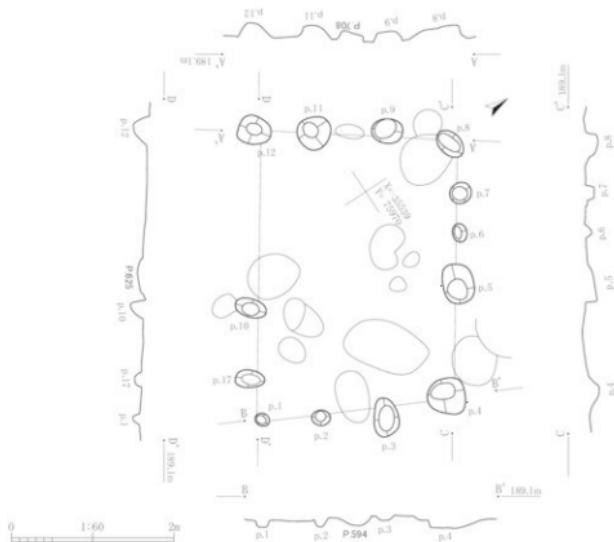
S125

- 1 10YR2/2黒褐色シルト 粘性や少々の塊 繋りやや硬  
10cmの覆土量混入 柱痕
  - 2 10YR2/3黒褐色シルト 粘性や少々の塊 繋りやや硬  
最後に埋め戻した版え方埋土
  - 3 10YR2/2黒褐色シルトと10YR5M5暗褐色砂礫の混合  
埋め戻し土 版え方埋土
  - 4 10YR4褐色+10YR5-6黃褐色砂礫層 埋め戻し土 版え方埋土
  - 5 10YR5-6黃褐色砂礫層 塵山

S126



第28図 SI25・26竪穴建物跡



第29図 SI27竪穴建物跡

### SI27竪穴建物跡（第29図、写真図版32）

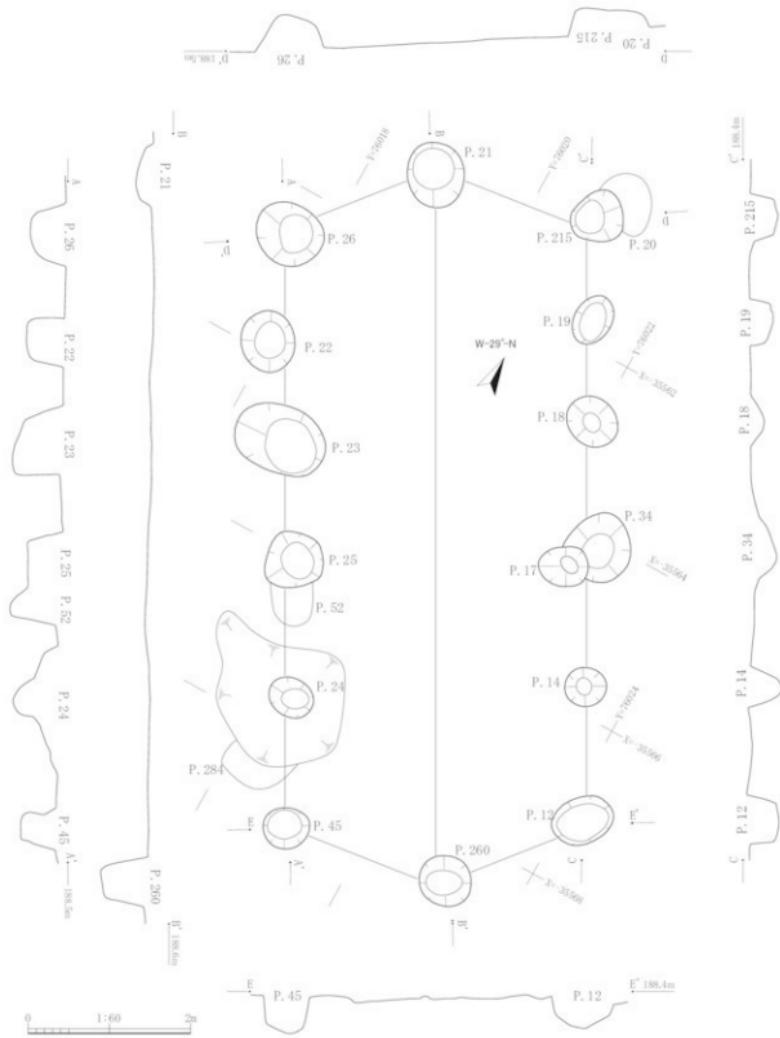
調査区西側のX=-35539・Y=75970付近に位置する。周辺に多数の柱穴状土坑を検出している箇所で、方形に配置されると見られる柱穴のまとまりを確認した。規模・形状は、柱穴位置が壁際にあるとすれば、 $4.3 \times 4.0\text{m}$ の略方形を呈すると考えられる。床面はほぼ平坦だが、遺構の掘り込みは認められなかった。また、表土が $10\sim20\text{cm}$ で、表土直下に遺構面があることと、砂礫層が露出する区域であることから、かなり荒れた状況で確認した。このなか、遺構プランの壁際に存在すると考えられるp.1~16の柱穴状土坑計16個を検出した。柱穴同士の間隔はかなり狭く、浅い。また、南側については削平の影響から確認できなかった。

柱穴状土坑からは縄文土器を出土しているが、不明確ながら遺構形状から中世に所属すると考えられる。

### (3) 捜立柱建物跡

### SB01掘立柱建物跡（第30図、写真図版33）

調査区南側のX=-35564、Y=76020付近に位置する。軸線方向はW29°Nである。周辺に柱穴状土坑を多数検出した箇所で、並列する柱穴列として確認した。規模・形状は、長軸7.5×短軸3.7m、棟持ち柱間は8.7mで、長方形の形状を呈する。埋土はすべて黒褐色土で、小～中疊を多く含む。遺構プラン内はほぼ平坦であるが、大半が砂礫層上面に遺構が構築されているため、地山の床面に疊が多数散在する。建物を構成する柱穴状土坑は、P.12・14・17～19・21～26・34・45・215・260の計14個が挙げられる。P.21・260が棟持ち柱の柱穴状土坑、西列がP.22・23～26・45、東列がP.12・14・17～19・34・215となる。柱間寸法は一定せず、1～2mの間が存在する。堅穴住居跡群と同時期の縄文



第30図 SB01掘立柱建物跡

時代中期後～末葉の遺物が出土していること、外側に張り出す棟持ち柱の柱穴位置・不揃いな柱間寸法などから縄文時代中期後～末葉に所属すると考えられる。

#### SB02掘立柱建物跡（第31図、写真図版33）

調査区中央北側のX=-35545・Y=76007付近に位置する。軸線方向はW13° Nである。周辺に柱穴を多数検出した箇所で、並列する柱穴列として確認した。規模・形状は、長軸5.0×短軸3.0m以上で、北側は調査区外へ続くが方形基調のプランと考えられる。埋土はすべて黒褐色土で、小～中礫を多く含む。遺構プラン内は若干東へ下るがほぼ平坦で、黄褐色シルト主体の地山面で構成される。建物を構成する柱穴状土坑は、P.60～64・109・360・361・417～419の計11個である。柱間寸法は、4尺（約121cm）と見られる。柱通りが直線でないものもあり、やや歪んでいるが、上部では揃っているのかもしれない。検出した箇所は小規模な建物の底部分が想定される。これらの柱間寸法が揃っていることから、周辺にある堅穴建物跡と同時期の中世に所属すると考えられる。

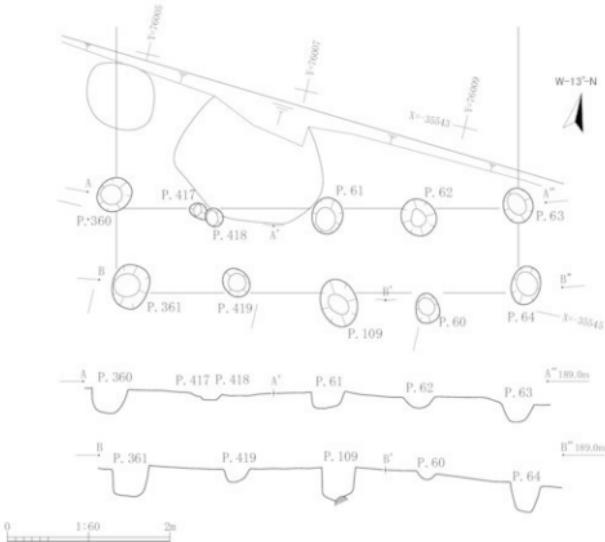
#### （4）土 坑

##### SK01土坑（第32図、写真図版34）

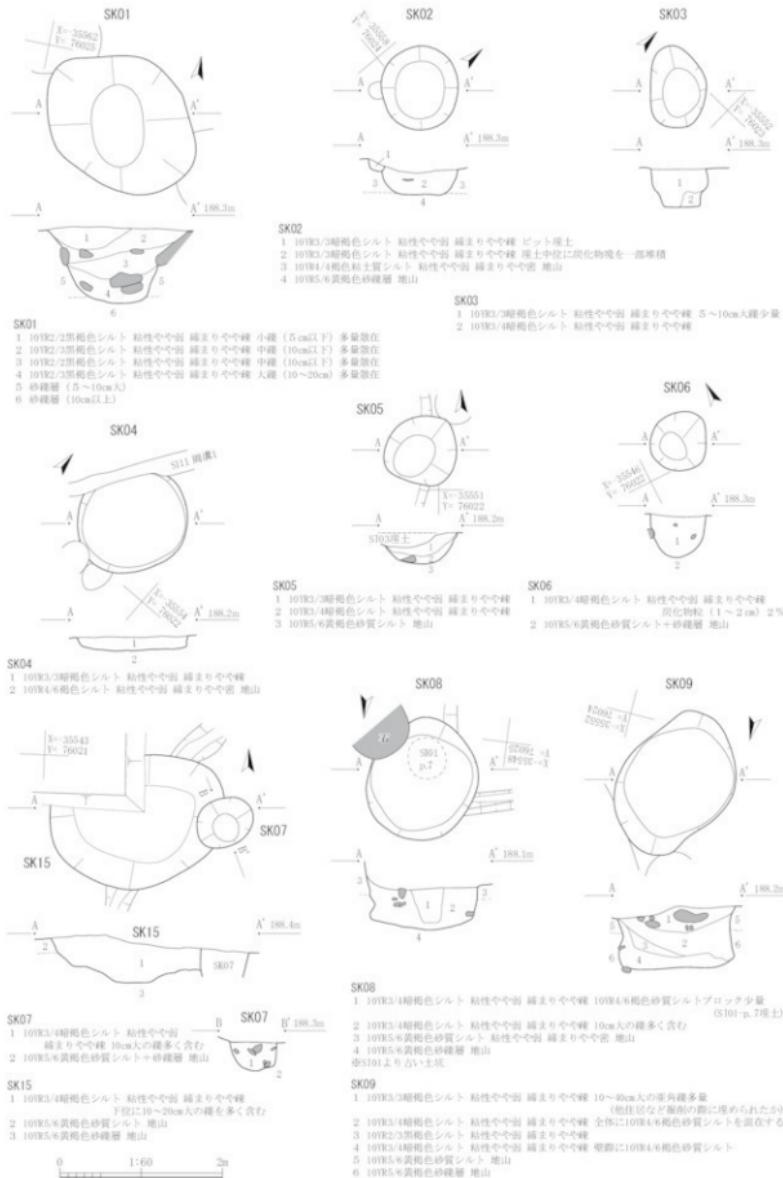
調査区東側のX=-35562・Y=76025付近に位置する。規模・形状は、1.75×1.7mの不整円形を呈する。埋土には、地山砂礫層から流入した礫が多量に含まれる。埋土中から出土した土器から、縄文時代中期末葉の大木10式古段階に所属すると考えられる。

##### SK02土坑（第32図、写真図版34）

調査区東側のX=-35558・Y=76024付近に位置する。規模・形状は、1.05×0.95mの略円形を呈する。SI11と重複するが、本遺構が古い。深さ30cm、断面形は鍋底形である。縄文時代中期後～末葉の大木9式新段階～大木10式古段階に所属すると考えられる。



第31図 SB02掘立柱建物跡



第32図 SK01~09・15土坑

**SK03土坑（第32図、写真図版34）**

調査区東側のX=-35552・Y=76023付近に位置する。規模・形状は、1.0×0.7mの楕円形を呈する。SI05・06などと重複するが、本遺構が古い。縄文時代中期後～末葉に所属すると考えられる。

**SK04土坑（第32図、写真図版34）**

調査区東側のX=-35554・Y=76022付近に位置する。規模・形状は、1.3×1.2mの略円形を呈する。北西側は、SI11周溝に切られる。縄文時代中期後～末葉の大木9式古段階に所属すると考えられる。

**SK05土坑（第32図、写真図版35）**

調査区東側のX=-35551・Y=76022付近に位置する。規模・形状は、0.9×0.85mの略円形を呈する。SI03と重複しており、これよりも古い。重複関係から、縄文時代中期後～末葉の大木9式新～大木10式中段階に所属すると考えられる。

**SK06土坑（第32図、写真図版35）**

調査区東側のX=-35546・Y=76022付近に位置する。規模・形状は、0.75×0.68mの不整円形を呈する。SI14プラン内に位置しており、単独で確認したがSI14柱穴の可能性もある。出土遺物はないが、SI14との関係から縄文時代中期後～末葉の大木9式古段階に所属する可能性がある。

**SK07土坑（第32図、写真図版35）**

調査区東側のX=-35543・Y=76021付近に位置する。規模・形状は、0.75×0.6mの略円形を呈する。SK15と重複しており、本遺構が新しい。SK06同様、SI14プラン内に位置しており、単独で確認したがSI14柱穴の可能性もある。出土遺物から、縄文時代中期後～末葉に所属すると考えられる。

**SK08土坑（第32図、写真図版35）**

調査区東側のX=-35548・Y=76025付近に位置する。規模・形状は、1.5×1.4mの略円形を呈する。SI01と重複しており、本遺構が古い。プラン内にSI01p.7があり、切られている。出土遺物とSI01との重複関係から、縄文時代中期後～末葉の大木9式古段階に属すると考えられる。

**SK09土坑（第32図、写真図版36）**

調査区東側のX=-35552・Y=76024付近に位置する。規模・形状は、1.8×1.4mの楕円形を呈する。SI05炉と重複しており、本遺構が古い。出土遺物及びSI05炉との重複関係から、SI05よりも古い縄文時代中期後～末葉の大木9式古段階に所属すると考えられる。

**SK10土坑（第33図、写真図版36）**

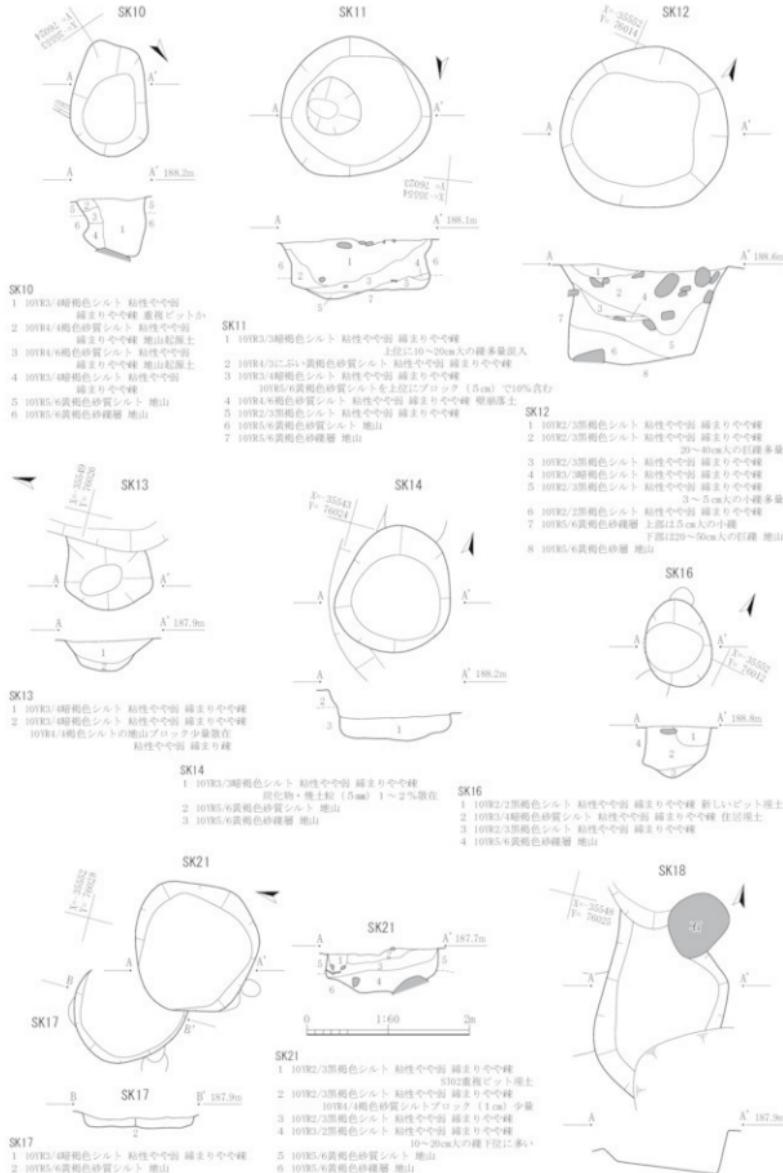
調査区東側のX=-35553・Y=76024付近に位置する。規模・形状は、1.4×1.0mの不整楕円形を呈する。SK09同様SI05炉と重複しており、本遺構が古い。また、SI06の柱穴か遺構内にすっぽり入る形で、柱穴状ピットに切られている。出土遺物及びSI05炉との重複関係から、SI05よりも古い縄文時代中期後～末葉の大木9式古段階に所属すると考えられる。

**SK11土坑（第33図、写真図版36）**

調査区東側のX=-35554・Y=76023付近に位置する。SI06炉と重複しており、本遺構が古い。規模・形状は、1.9×1.7mの略円形を呈する。底面には、径0.7m円形の浅いピットを伴う。出土遺物及びSI06炉との重複関係から、SI06よりも古い縄文時代中期後～末葉の大木9式古段階に所属すると考えられる。

**SK12土坑（第33図、写真図版37）**

調査区中央東側のX=-35552・Y=76014付近に位置する。他遺構との重複はない。規模・形状は、2.1×2.0mの略円形を呈する。埋土中には掘り込んだ砂疊層から流入したと考えられる多量の礫が含まれていた。出土遺物から、縄文時代中期後～末葉の大木9式古～新段階に所属すると考えられる。



第33図 SK10~14・16~18・21土坑

**SK13土坑（第33図、写真図版36）**

調査区東側のX=-35549・Y=76026付近に位置する。SI01・SK18と重複し、SI01より古く、SK18より新しい。規模・形状は、1.1×0.8mの不整形を呈する。出土遺物とSI01との重複関係から、SI01よりも古い中期末葉の大木10式古段階に所属すると考えられる。

**SK14土坑（第33図、写真図版37）**

調査区東側のX=-35543・Y=76024付近に位置する。SI12と重複し、本遺構が旧期である。規模・形状は、1.6×1.4mの楕円形を呈する。埋土中から、炭化物・焼土粒を確認している。SI12との重複関係と出土遺物から、縄文時代中期後～末葉の大木9式新段階に所属すると考えられる。

**SK15土坑（第33図、写真図版37）**

調査区東側のX=-35543・Y=76021付近に位置する。規模・形状は、2.2×1.7mの楕円形を呈する。SI14周溝・SK07と重複しており、本遺構が古い。北西側は調査区外へ延びている。埋土中には、10cm大の礫を多く含む。底面から、大木9式新段階に比定される土器を出土しており、縄文時代中期後～末葉に所属すると考えられる。

**SK16土坑（第33図、写真図版38）**

調査区中央東側のX=-35552・Y=76012付近に位置する。規模・形状は、1.1×0.8mの楕円形を呈する。P.165・288及びプラン内のピットと重複し、切られる。出土遺物から、縄文時代前期初頭の可能性がある。

**SK17土坑（第33図、写真図版37）**

調査区東側のX=-35552・Y=76028付近に位置する。SI02・SK21と重複しており、本遺構が古い。規模・形状は、1.4×1.3mで略円形を呈する。SI02炉の下に潜り込む形で検出した。SI02との重複関係と出土遺物から、縄文時代中期末葉の大木10式古段階以前の遺構と捉えられる。

**SK18土坑（第33図、写真図版36）**

調査区東側のX=-35548・Y=76025付近に位置する。SI01・SK08・SK13と重複しており、いずれよりも古いと考えられる。また、南側は住宅基礎の搅乱に切られる。重複が著しく、遺構断面は記録できなかった。出土遺物はないが、SK08よりも古い縄文時代中期後～末葉の大木9式古段階以前の遺構と考えられる。

**SK19土坑（第34図、写真図版38）**

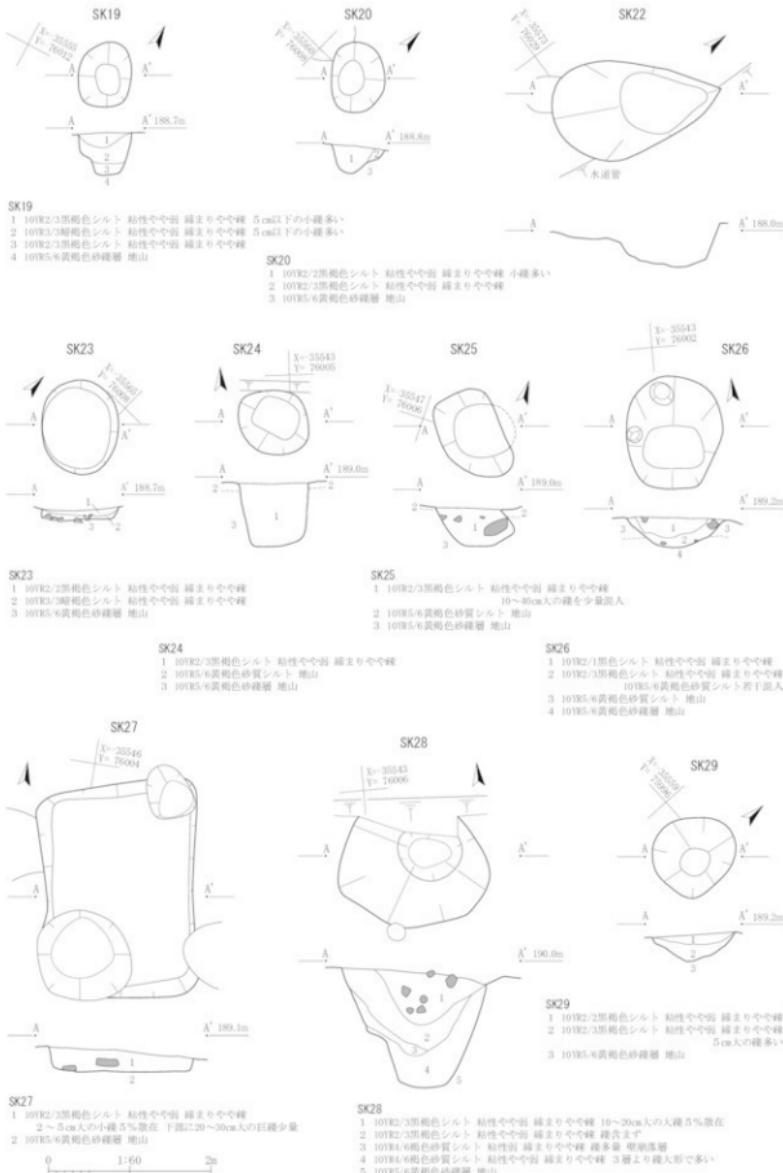
調査区中央東側のX=-35555・Y=76012付近に位置する。他遺構との重複はない。規模・形状は、0.8×0.7mの楕円形を呈する。砂礫層に構築されているため、埋土中に流入した礫が多い。出土遺物から、縄文時代中期後～末葉と考えられる。

**SK20土坑（第34図、写真図版38）**

調査区中央東側のX=-35560・Y=76008付近に位置する。P.424と重複し、切られる。規模・形状は、0.85×0.65mの楕円形を呈する。SK19同様、砂礫層に構築されているため、埋土中に流入した礫が多い。SK19と同じ縄文時代中期後～末葉と考えられる。

**SK21土坑（第33図、写真図版38）**

調査区東側のX=-35552・Y=76028付近に位置する。SI02・SK17と重複しており、SI02より古く、SK17より新しい。規模・形状は、1.55×1.55mの不整円形を呈する。SI02炉の下に潜り込む形で検出した。SI02との重複関係と出土遺物から、縄文時代中期末葉の大木10式古段階以前の遺構と考えられる。



第34図 SK19・20・22~29土坑

**SK22土坑（第34図、写真図版39）**

調査区南側のX=-35573・Y=76029付近に位置する。東側を水道管に切られている。規模・形状は、1.6×(1.35)mの不整形を呈する。出土遺物から、縄文時代中期後～末葉に所属すると考えられる。

**SK23土坑（第34図、写真図版39）**

調査区中央南側のX=-35565・Y=76008付近に位置する。規模・形状は、1.15×0.95mの略円形を呈する。出土遺物がないことから、時期不明である。

**SK24土坑（第34図、写真図版39）**

調査区中央北側のX=-35543・76005付近に位置する。規模・形状は、0.95×0.8mの略円形を呈する。SB02と重複しているが、本遺構が古い。出土遺物から、縄文時代中期後～末葉の大木9式古段階に所属すると考えられる。

**SK25土坑（第34図、写真図版39）**

調査区中央北側のX=-35547・Y=76006付近に位置する。規模・形状は、1.15×0.75mの不整形を呈する。東側は底が潜り込んでおり、袋状の断面形となる。出土遺物から、縄文時代中期後～末葉と考えられる。

**SK26土坑（第34図、写真図版39）**

調査区中央北側のX=-35543・Y=76002付近に位置する。規模・形状は、1.4×1.2mの楕円形を呈する。出土遺物から、縄文時代中期後～末葉の大木9式古段階に所属すると考えられる。

**SK27土坑（第34図、写真図版40）**

調査区中央北側のX=-35546・Y=76004付近に位置する。規模・形状は、2.65×1.8mの隅丸長方形を呈する。P.557・559と重複し、これに切られる。遺物は大木10式古段階と思われる鉢片を出土しているが、形状からこれより新しい時期（中世か）の可能性もある。

**SK28土坑（第34図、写真図版40）**

調査区中央北端のX=-35543・Y=76006付近に位置する。規模・形状は、1.9×1.5m以上の不整形を呈する。出土遺物から、縄文時代中期後～末葉の大木9式古段階に所属すると考えられる。

**SK29土坑（第34図、写真図版40）**

調査区中央南側のX=-35559・Y=75996付近に位置する。規模・形状は、1.0×1.0mの略円形を呈する。出土遺物はなく、時期は不明である。

**SK30土坑（第35図、写真図版40）**

調査区東北端のX=-35541・Y=76026付近に位置する。SI12と重複しており、切られる。規模・形状は、東半をNTT埋設管によって切られているが1.75×(1.0)mの不整形を呈すると見られる。出土遺物はないが、SI12との重複関係から縄文時代中期末葉の大木10式古段階より古いと考えられる。

**SK32土坑（第35図、写真図版41）**

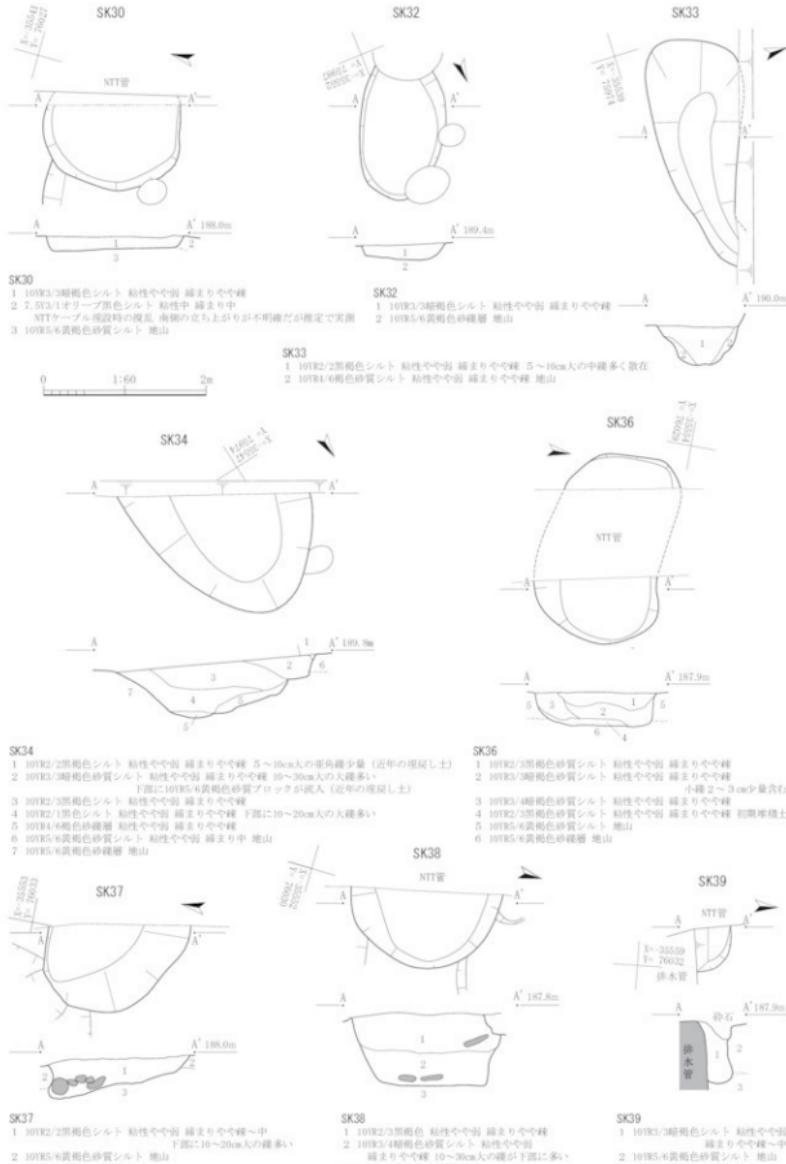
調査区中央南側のX=-35551・Y=75987付近に位置する。P.691・696と重複し、切られる。規模・形状は、<1.8>×1.05mの楕円形を呈する。出土遺物はないが、P.691・696との重複関係からこれらより新しい時期に位置付けられる。

**SK33土坑（第35図、写真図版41）**

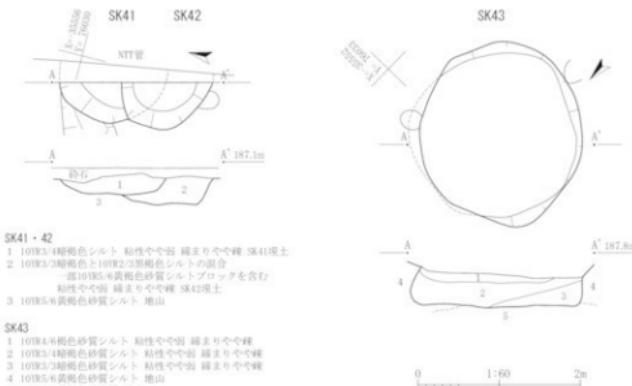
調査区西側のX=-35538・Y=75974付近に位置する。規模・形状は、(2.7)×(1.15)mの不整形を呈し、北側は調査区外へ延びる。出土遺物はなく、時期は不明である。

**SK34土坑（第35図）**

調査区西側のX=-35546・Y=75974付近に位置する。遺構南半は、調査区外へと延びる。規模・形



第35図 SK30・32~34・36~39土坑



第36図 SK41~43土坑

状は、(2.4) × (1.45)mの楕円形と見られる。埋土中に木部が付着した釘や銭貨（新寛永）を出土していることから、改葬後の墓坑の可能性がある。また、銭貨に鉄一文銭が含まれることから、埋葬は元文4（1738）年以降と考えられる。

#### SK36土坑（第35図、写真図版41）

調査区東側のX=355544・Y=76029付近に位置する。遺構中央をNTT埋設管によって切られている。規模・形状は、2.35×1.5mの小判形を呈する。出土遺物から、縄文時代中期後～末葉の大木9式古段階に所属すると考えられる。

#### SK37土坑（第35図、写真図版41）

調査区東端のX=-35553・Y=76032付近に位置する。SI29と重複しており、本遺構が切られている。また、遺構東半は、調査区外へと延びる。規模・形状は、(1.75) × (1.05)mの不整形を呈すると見られる。出土遺物から、縄文時代中期後～末葉の大木9式古段階に所属すると考えられる。

#### SK38土坑（第35図、写真図版41）

調査区東側のX=-35551・Y=76030付近に位置する。SI29・30と重複しており、本遺構が切られる。また、遺構西半はNTT埋設管に切られる。規模・形状は、1.9 × (0.95)mの略円形と見られる。出土遺物から、縄文時代中期後～末葉と考えられる。

#### SK39土坑（第35図、写真図版41）

調査区東側のX=-35558・Y=76031付近に位置する。遺構西側をNTT埋設管、遺構南側を道路側溝から延びる排水管に切られる。規模・形状は、残存値で(0.55) × (0.45)mの円形基調と見られる。出土遺物から、縄文時代中期末葉の大木10式古段階に所属すると考えられる。

#### SK41・42土坑（第36図、写真図版42）

調査区東側のX=-35556・Y=76029付近に位置する。遺構東半をNTT埋設管に切られる。規模・形状は、SK41が(1.3) × (0.5)mの略円形、SK42が(1.1) × (0.57)mの略円形を呈する。両遺構は重複しており、断面観察からSK41がSK42より新しい。出土遺物から、縄文時代中期後～末葉と考えられる。

#### SK43土坑（第36図、写真図版42）

調査区東側のX=-35552・Y=76032付近に位置する。遺構全体でSI29と重複しており、切られる。



第37図 SK31・35墓坑

規模・形状は、 $2.25 \times 2.0\text{m}$ の略円形でやや袋状の断面形を呈する。出土遺物は、縄文時代前期初頭と中期末葉の土器片を含んでおり、縄文時代中期末葉以前に埋没したと考えられる。

### (5) 墓坑

#### SK31墓坑（第37図、写真図版42）

調査区西側のX=-35551・Y=75984付近に位置する。規模・形状は、 $1.35 \times 1.15\text{m}$ の不整円形を呈する。底面中央から性別不明の成人人骨一体分を出土した。その他に、副葬品の煙管や鉄、銭貨を出土している。新寛永を含んでいることから、寛文8（1668）年以降に埋葬されたと考えられる。

#### SK35墓坑（第37図、写真図版42）

調査区西側のX=-35545・Y=75976付近に位置する。規模・形状は、 $1.0 \times 0.8\text{m}$ の不整円形を呈する。底面東側から性別不明の成人人骨一体分を出土した。その他に、副葬品の銭貨19点を出土している。出土銭貨に、初鋳年1863年の文久永寶や明治10（1877）年の半銭を含んでいることから、これ以降に埋葬されたと考えられる。

### (6) 焼土

#### SF01焼土（第38図、写真図版42）

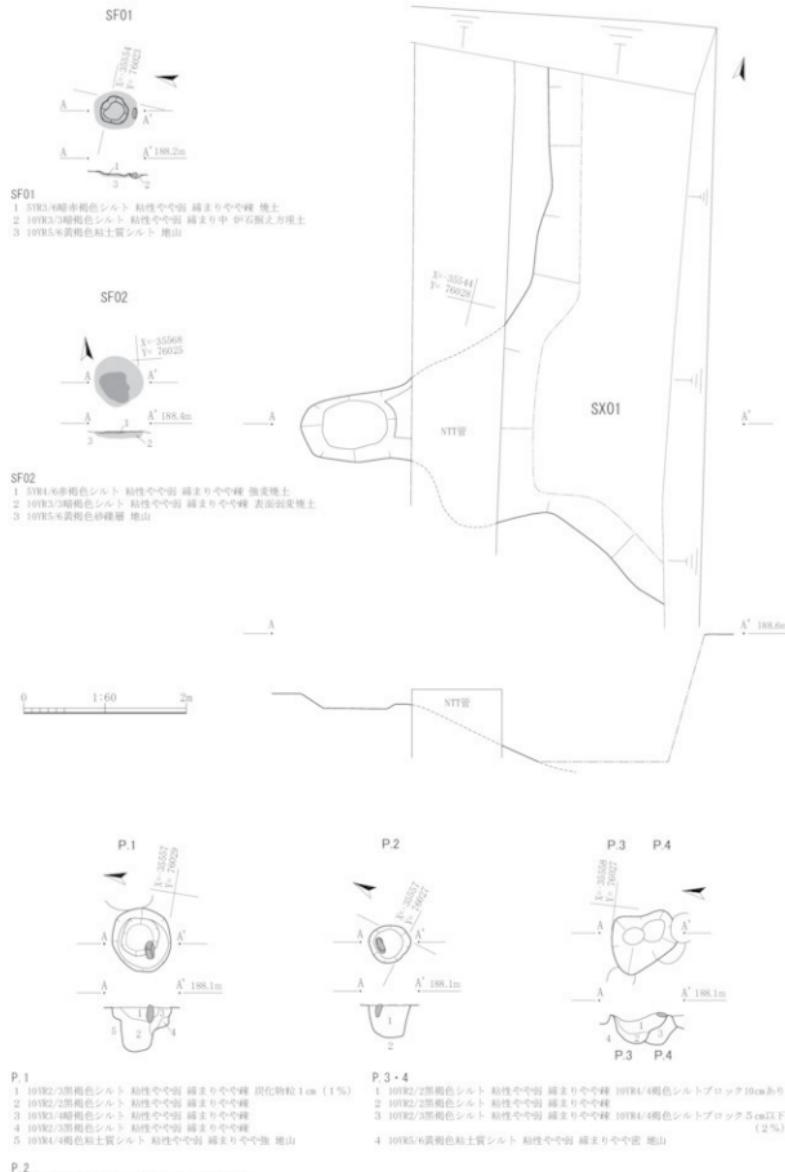
調査区東側のX=-35554・Y=76022付近に位置する。焼成面の規模・形状は、 $0.50 \times 0.45\text{m}$ の略円形を呈する。焼成範囲の中に、 $0.45 \times 0.40\text{m}$ 、深さ3cmの凹みを有する。焼土の厚さは2~4cmほどで、弱変している。焼成範囲の南端に長さ13cmの亜円窯1個が設置されている。SI05・06のプラン内で確認したことから、縄文時代中期後半に所属すると考えられる。

#### SF02焼土（第38図、写真図版42）

調査区南東側のX=-35568・Y=76024付近に位置する。焼成面の規模・形状は、 $0.63 \times 0.6\text{m}$ の略円形を呈する。焼土の厚さは、2cmほどが強変、これより下位は弱変している。重複する遺構や出土遺物はなく、時期不明である。

### (7) 柱穴状土坑（第6~9図、第3表）

調査区全域から、722個確認した。このうち、帰属遺構が判明しているのはSB01掘立柱建物跡14個



第38図 SF01・02焼土、P.1～4柱穴状土坑、SX01落ち込み